
陸戦ウィッチ

七転八倒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陸戦ウイッチ

【NZコード】

N3676U

【作者名】

七転八倒

【あらすじ】

時代設定は大東亜戦争を軸とした、ストライクウイッチーズオリキヤ
ラメイン
小説同人

戦車系メカ娘が好きで陸戦物を書き出しましたが、あいにく資料・インターネット環境が虚無つてますので情報に誤りが多数生じていますがお許し下さい。

この作品は、作者の暇潰しと妄想の産物です。

第一話 初見

扶桑国は九州の山岳地、背振山を抱く吉野ヶ里町。

その町に西日本の空を護る部隊、扶桑軍三養基空軍基地が駐屯していた。

その日は特に空も青く、雲一つ見えない美しい青空。

そんな空の下、軍基地内のグラウンドを走る一人の兵士。編み上げの半長靴に陸軍の戦闘ズボン、白いシャツにこれまた陸軍の遮熱帽を被っていた。

空軍基地内に陸軍の軍人が居ない訳では無いが、今この運動場を使用している兵士は一人だけ、その時真っ青な空に細い白き線が伸びて征く。

プロペラ音に首を上げ、伸びゆく線を見る。

その先端は人、その機動性と汎用性の高さから常に軍事の最先端に位置する魔女。

この時代常に前線に位置し、勝敗を左右するのは彼女達ウイッチの強さとされていた。

そんな飛び征くウイッチを兵士はチラリと遮熱帽のつばから仰ぎ見る、白い線は背振山へ向け消えて行く、兵士はそれを見つつもグラウンドのカーブを曲がり背を向けた。

その瞬間

『ピシュワウンー！！！』

空気が破裂する音と緋い熱線が山中から先程のウイッチに向け次々に掃射される。

「なつ！」

射撃音に振り返る兵士、それと同時にけたたましいサイレンと警鐘が打ち鳴らされ基地内は一気に慌ただしく成る、そこにタオルを持

つて綺麗な洋髪を左右に振りながら走つて来る一人の女性兵士。

彼女はタオルを降りサイレンに負けない様叫ながら

「曹長！大変ですよ、敵が背振山中に！」

曹長と呼ばれた遮熱帽の兵士はその女性兵士に向かい走りながら叫ぶ

「肉眼で確認出来ている、出撃出来るのか神崎！」

曹長は神崎の持つたタオルを受け取り速足で前へ前へ、その背中を追いながら

「出撃しようにも、此処は空軍基地。警備の陸軍兵士しかいません、空軍のウイッチに任せて私達は市民の誘導だと思います」

神崎の言う事は最もだ、航空戦の中地べたを這いずる陸軍兵など邪魔でしか無い。

曹長は遮熱帽のつばを下に引き、犬歯を剥き悔しさに歯噛みする。

毎回毎回そうだ、ネウロイ出現の際俺達帝国陸軍兵士はこうやって

「…………くそったれ、分かっているとも」

俺は熱くなる心から熱が冷めて行く様に、歩む足を止める。滑走路から飛び立つウイッチ達を、美しい青空の戦場へ向かう女達を、男である俺は見送る事しか出来ない。

その後赤やけの空の中、背振山中に潜伏していた敵ネウロイは三養基空軍ウイッチ隊により撃退された。

発見が遅れたのはネウロイが小型で有り、昨週玄海灘で発見攻撃されその追撃を逃れた残党、ようはどさくさに紛れて逃げたこぼれ球。扶桑軍のレーダーはまだまだ脆弱、いまだに人海戦術に頼るしか無いがそれも人がやること、十中八九でも一か二は分からぬ。

幸い民間人に被害もなく戦闘も山中、家や建物への被害も最小限に抑えられた。

夕暮れの中、西方管内の応援部隊を待ち用心の為山狩りを陸軍主導でやることに成つたが。

集結地として摘発された吉野ヶ里遺跡地区に次々と部隊が集まつて来る、三養基憲兵隊と共に車両整備をする兵の中に遮熱帽と洋髪の

姿が有つた。

「あれば、玖珠の戦車隊か」

陸軍の男性一般兵の中に女性兵士の部隊が目に入った。

彼女達は地上戦用の魔導ユニットを装備した玖珠戦車ウイッチ隊。

「そう見たいですね、まあ空軍ばかりがウイッチでは有りませんし。

こんな時でも無いと陸軍は口の目を見ませんしね」

「神崎貴様はあれには乗れんのか？」

俺は隣にいた神崎伍長に質問してみた、神崎は女だし魔導力通信機材等も扱える。

「いやあそれが実は魔力値が足りず、エンジン吹かしたらえんこでそのまま」

何やらあまり聞いて欲しくなかつた様で、下を向いてダレてしまつた。

何だか俺が悪い様で自分の顎をしゃくつていると。

「おい！福岡曹長はいるか」

「はつ！此処に」

俺は条件反射的に声のした方向に向き直り、右拳を上に突き上げる。声の主は幹部制服を着た、五十程の少佐。

「おお福岡、捜したぞ。貴様はこの村の出だつたな」

「はつ！ そうで有ります中隊長」

そうこの少佐は俺が所属する陸軍別府駐屯地中隊長。隣にいた神崎も慌てて敬礼する、中隊長は答礼し。

「ああ君が神崎伍長か、これは丁度良かつた。二人にはウイッチと共に行動してもらつ」

俺はその言葉に間髪を入れず発言する。

「了解しました中隊長、ですが神崎伍長は技術兵ですが随伴ですか、それとも一人で後方勤務でしようか」

俺は速る心を全面に出し、戦車随伴兵で行かせると中隊長に進言する。

「判つてゐる福岡、貴様は随伴兵だ。伍長は後方で魔導通信機で我

々とウイッチとの通信兵だ、一人共本部指揮所まで来てくれ

「「了解しました」」

久々の戦闘、ネウロイ共め目にもの見せてやる。

俺は高鳴る心を抑える様に、遮熱帽を深く被り直す。

福岡と神崎は中隊長と共に本部指揮所に入ると、中には山図を拡げた長机、それを囲む様にお偉方と玖珠ウイッチ隊と思われる女性兵士が一人。

中で二人の紹介し、作戦会議は始まった。

話しあはこうだ、三養基ウイッチ隊が背振山中のネウロイ撃退後、航空からの偵察を続行。

ネウロイ攻撃地点近くの谷間に、少数だが生存しているのを確認。これを殲滅しようと攻撃を続行するも深い木々と岩場の影に潜伏する敵に対し決定打が打てづ、航空機による攻撃は一時中止。陸路からの直接攻撃が妥当であるとして、空軍から陸軍へと作戦が以降した。

なお現在も三養基ウイッチ達による偵察は実行中、陸軍作戦開始時刻まで空から睨みを効かせている。

それで現地人の福岡と陸戦ウイッチの任務は

「では山狩りを実施しつつの攻撃。包囲殲滅でよろしいのでしょうか」

俺は任務確認として発言する。

「そうだ。まず玖珠戦車隊と別府歩兵連隊の合同部隊が安全線まで包囲、君らウイッチ班でネウロイ集結地を強襲。それを合図に全軍一挙に脊振山を取り戻す」

安全な穴倉に潜む化物共をあぶり出し撃破、どう考へても俺達ウイッチ班が一番危険だ、手負いの獣を追いたてて巣から連れ出さないといけない訳だ。

その巣があると思われる場所も樹々に若と、山伏でも近づかない険

しい場所だ。

行くにも帰るにも地獄の鬼ヶ島。

何か文句の一つでも言い出すかと、幹部達と並ぶウイッチを見るが黙つて聞いてるだけ。

意義も出ず作戦会議は終了、俺は指揮所から出るウイッチを呼び止めた。

「失礼します、此の度随伴します福岡曹長です」

そのウイッチは日本髪の銀杏返し、上着は濃い緑の陸軍制服、下には恐らく水着を着用しているはずだ。

少々気になるのが礼式軍刀にしては武骨な太刀を腰に差している。

「ああそうか曹長、私は如月だ階級は中尉。男でこの任務は酷だと思つがまつよろしく」

如月中尉は背を向けたままさう言つとそのまま出て行こうとするが、俺は足を滑らせ中尉の眼前に立ちはだかる。

「中尉、あなたは男を足で纏いだと」

何時もなら、いや。

コイツからは完全に男を馬鹿にしている気配が、ビンディングに感じられる。

中尉はかつたるそつに髪を搔き、顎をくいっと上げ眼前の俺に視線を飛ばす。

「はあ、あのな曹長。君はネウロイと鬪はんだり? 君はただの案内人だ、それ以上は期待してない。精々夜露死苦」

聞き分けの無いガキを見る様な眼で、鬪いもせんお荷物と決め付け、俺の脇を抜けながら夜露死苦だと!

この福岡陣。

此の世に生を受け一十一年、これ程の屈辱!

「負けん! 負けんぞ如月中尉!」

夕闇に消え行く中尉の背中に俺は叫を浴びせるが、その返事は後ろ手にヒラヒラと手を降るのみ。

「～おつお帰へり、何か面白そうやな中尉。何やあつたか？」

「（笑）ふつ何、たまには面白い男もいるもんだとね」

そういうしていのうちに作戦開始時刻、福岡は装備を身に纏い大股で玖珠戦車隊の車両所に向かつていた。

次々にウイッチ達の陸戦ユニットを乗せたトラックが出て行く姿を横目に、指定されたトラックの前に立つ。

勿論仁王立ち、だが誰も居ない。

先程の最後のトラックも出てしまい、この車両所にいるのもこのトラックと福岡ただ一人、周りの視線も気にせず仁王立ちし続けた彼であつたが流石に少々気になりだした。

彼は耳のインカムに連絡を入れるかどうかするか考えた時、ニコチンを含んだ煙が彼の顔面を強襲した。

「ブツ！ ウェッゲハツ！！！」

喫煙者で無い彼が咽せ苦しんでいると、その煙の発生原因が。

「なんや怖い顔しとる割には、初体験もまだかい兄さん」

「なつ何をう！」

なんとか涙目になりながら上体を起こすも。

「なんやその反応。どつちもか、真性かいな

「ふつなああ

見事にカウンターを浴び真っ白になってしまった。

「まあそこまでにしてやれよ桂木、曹長が風化しちまつ

不意討ちに秒殺された福岡にまさかの助け、如月中尉がその桂木の後ろから現れトラックの鍵を渡していた。

「ああこの兄さんが中尉が言いよつたおもろい奴か。ふうん、まあ

そこそこ？ やな」

俺に煙と深い傷跡を残したそいつは俺の顔をジロジロ見る、ざんばら髪に作業服、引っ掛ける様に白衣を着ているがくわえタバコの女。

「よくよく噛み付くから気を付けるよ桂木」

助手席の扉を開けながら口角を上げ、そんな事を言つ。

「そらしかたない、兄さん若いからなあ」

俺そちのけでゲラゲラ笑い出す一人、俺、何しに来たんだっけ。ダメージから立ち直れず立ちぼつかけていると、トラックのエンジンが唸りだし。

「おい、曹長。乗らないならもつ行くぞ」

助手席から如月中尉が声をかけて来るが、トラックに何時の間にか二人は乗り込んでいて、既に動き出していた。

「あちよい待て！」

その声に運転席の桂木は壮絶な笑顔の三日月顔で、アクセルを踏み込み答いやがる。

俺はマフラーから黒煙を吹き出し加速するトラックの幌を必死で掴み、荷台に滑り込む。

「くそ、何て奴等だ」

運転席側から笑い声が聞こえる気がするが、福岡は脱げかけた遮熱帽を深く被り直し。

ふて腐れてドカリと、乗務員席に腰を落とす。

坂本峠

坂本峠

走り出したトラックは一路脊振山の東側、坂本峠へと到着した。

この峠付近は岩盤や岩場を穿いてできた渓流が多い、通常でも水量が多い上、岩の上に土が被つている状況なので雪溶けや大雨が降れば即崩れて来る。

崩れてなくとも路面が貧弱で、馬車はおろか車両の類など通れない場所だ。

俺は先んじて下車し、トラックを誘導し侵入出来うる所まで入れる。その後停車したトラックの荷台から、魔導ユニットを桂木が降ろす作業に入った、奴は整備兵らしく油圧式の機械を作動させ、陸戦ユニットがゲージ固定のまま降ろされる。

俺は自分のインカムから神崎を呼び出し、配置完了を報告する。

『本部了解。ネウロイ発見後再度連絡されたし、以上。』

「追い犬了解、通信終り」

俺は通信終りを中尉に報告し、

「中尉、ユニットが一台のみですがこの班の兵力は？」

「ん？ 言つてなかつたか、戦力はは私とお前だけだぞ曹長。まあ貴様は一般兵だ、あまり期待はしどうん、周りだけ見てろ」

「なつ！」

何なんだこのアマ！！！

俺はこの中尉の歯にもの着せぬ物言いに憤慨しながらも、改めてこの作戦の無謀に思えてきた。

特にこの様な複数の敵と一緒に交戦が起こり得る戦闘において、いかに敵と距離を取りつつ戦つか、いくらネウロイの場所が判明しているとわいえ、突発的戦闘は避けられない。

火力で押す戦車は懐にはいられれば。

俺がそう考えをまとめている時、中尉の陸戦ユニットが降ろせれ光

射器で照らされる。

「？、これは七八の新型ですか？」

「ほう、少しはものを知ってる。だがこれはただの新型ではない、俊敏性と踏破性に視点を置いた七八改睦だ」

そのユニットは一般に見る鉄長と違い、膝関節と足首が見受けられる今までに無い姿のユニットであった。

「睦はわてが改良した陸戦ユニットやからな、あんな既製品の新型言われるのは心外や」

桂木が荷台から伸びる有線操作装置を扱いながら文句を言つ。

「はは、すまん桂木。判つているとも」

中尉はそう言ひ短靴を脱ぎ捨てると飛び上がり、見事な半捻りを加えユニットを装着する。

魔力光に照らされ中尉に犬の様な黒い垂れ耳と尻尾が生える、ゲージロックが解除され静かに第一歩が踏み出される。

「さあちよいと鬼退治に行こうか」

ユニットを装着しニヒルに笑うその顔は、月光に照らされ美しい刀身の煌めきの様だった。

俺はついその姿に見惚れてしまい、桂木の二タ一タ笑う顔と視線に慌てて視線を山に向け、遮熱帽を被り直す。

その後俺と中尉は背振山中に分け入る、本来なら山道を踏破するのに鉄長の戦車如きに負けはせんはずだった。

「無念だ」

「何か言つたか曹長？」

今俺は中尉の背、戦車ユニットの後部座席に薪の様に座している。

当初は自分の足で駆けていたが、この鉄長俺の頭上を跳ねて行きやがり終いには、

「曹長それでは日が上がる、背に乗れ！」

確かに通常の行軍速度なら日の出と同時に着くだろう、俺は意地で何とか並びながら踏破して行くが。

「 意固地だねえ。よつと」

「な！」

並走していた俺を右腕一本で持ち上げ、そのまま後部座席に降ろす。
『ヒヒヒ、ちゃんとお母さんに捕まつてる兄さん』
直後そんな無線を桂木が飛ばして来る、そして。

「では行くぞ！」

中尉のそんな言葉を背に聞いた瞬間、途轍もない下への重力。
俺は左手で座席の鉄パイプを握りしめ、右手で遮熱帽を抑える。
一瞬何が起こったか訳も判らざり、内臓が下に押さえ付けられ酸素が
一挙に

「ゴハ！！！」

「イツヤツハー！」

その時、一瞬重力から解き放なされた。

俺は硬く閉じた目をゆっくり開く、そしてその視界に広がる絶景に。

「凄い」

青く美しい満月と、照らされる山の木々。

「ハツハハ！まだまだ行くぞ曹長」

如月中尉が翔けるユーニットは、陸戦型にあるまじき速度と跳躍力で、
次々に山道を踏破して行く。

背にもたれている俺も次第にその速度に痺れていた、まるで天狗に
成った様だ。

「クツハハハ！凄いものだ！こいつは凄い！」

「フン、そうだろうともそうだろうとも！」

「ハツハハ！」

背振山中に一匹の天狗が高笑いを響かせる、今が戦時と忘れた様に。

背振山中

背振山中

驚くべき機動力で目標地点付近まで来た如月中尉と福岡連長は、本部の神崎伍長に無線連絡すると。

『えつ！もう着いたんですか！』

神崎が驚くのも無理は無い、予定より三時間も早く到着してしまってからだ。

福岡も確かに速過ぎると思っている、軍隊において時間は速過ぎても遅くとも駄目なのだ、だが着いてしまった以上報告の義務がある。福岡は軍の通信規則に則り、再度連絡を送る。

「我配置完了、部隊配置良いか送れ」

神崎も一瞬の驚きを隠し規律道理の通信を送る。

『確認し送る、待たれし、以上』

「追い犬了」

福岡は通信を終り、如月中尉に報告する。

「中尉連絡終りました。どうも速過ぎた様で」

中尉はそうかと一言。

そのまま腰の太刀を鞘ごと抜くと、石居で地面を突く。

眼光鋭く、目標地點を睨み据える。

『速過ぎても遅過ぎても女に嫌われるからなあ、自分勝手な自慰だとダメやで兄さん』

俺は目標近くだと呟つて、つい口から。

『なあつ！何を言つか桂木！…』

敵地を前に怒鳴り声など。

今や遅しと戦の風を感じている時に、流石にまずつたと口を押さえ横目で中尉を見るが、その眼光は敵地を見るばかり。

俺も無駄口は慎もうと岩場の影に片膝を付き自分の装備を点検する。

『そや兄さん。あんたあ装備はそのチンケな一連散弾銃くらいやが、

他持つとるん?』

俺は自前の散弾銃の薬室を開け、一連の弾を確認する。

銃身と床尾を短く切断し、片手で自由に成る様に整形してある。

「俺は近接戦闘が持ち味でね、それにこの戦場長物は邪魔なだけだ」

『ほほん、まあウチの中尉の前で接近戦は自分が情けのうなるで、

マジで(笑)』

俺はいろいろ言いたくなるが、それをグッと堪え。

「確かに中尉は太刀一本だが、手練れなのか?」

『はは堪えたな兄さん、まあ見れば判る。追いつければな
どうやら相当にやる様だが。

その時俺が見ているなか、中尉が膝を抜き一拳に前に弾け飛ぶ。

俺が何事かと岩陰から躍り出ると、七m程先で黒い熊の様な物体が
真つ二つに斬り裂かれ左右に崩れ、その先に右下段に血払いを済ま
せる中尉の姿だった。

その刀身は蒼焰を伴い月光よりも妖しく揺らいでいた。

俺はなんとか駆け出し中尉に向かうが

「来るな!!」

あまりの怒気に、その場で突つ伏したその瞬間。

獣の叫び声が響く。

岩場の影や木々の影から次々に真っ黒な塊が飛び出し、四方八方か
ら中尉に襲い掛かる。

俺は一瞬の出来事にその状況を見ている事しか出来なかつた、その
塊は中尉を中心に、折り重なる様に覆い被さる。

「クソ!」

俺は急ぎ駆け出し中尉に向かいその黒い塊に銃口を向ける、だが銃
火よりも早く、炎が上がつた。

目の前で焼夷弾が弾けた様な爆風と熱が俺を襲う、俺は条件反射で
その場に伏せる。

顔を守る腕の間からその状況を確認する、俺を襲つた爆炎は蒼く、
中尉を取り囲んだネウロイ共の中心から発せられた。

蒼き炎は闇を駆逐し、その中に戦神を誕生させていた。
その戦神が俺に怒鳴る。

「曹長何を寝ている！早く逃げろ！！！」

俺ははたと現実に戻り、半身持ち上げ前へ飛び出し中尉の右後方に散弾をぶち込む。

再度形を成しつつあつたそのネウロイは、後方に吹き飛び崩壊していく。

福岡は中尉の背中を護りつつ、散弾を装填し直す。

「俺は負けねえと言いましたし、これじゃ逃げれませんよ」

「ふつ、礼は言わんぞ。確かにもう退路は絶たれた」

そう先程かつ消された闇の後からも、ネウロイ共がゆらゆらと月光のなか陽炎の様に形を成し現れる。

その数三十強、そうしている間も次々と増えていく。

「残ったからには、自分の身は守れよ」

「中尉こそ、背後にお気を付けて下さいよっとー。」

闘いの合図の様に、福岡が飛び掛かるネウロイに散弾銃を発砲した瞬間。

如月が前へ跳び、切つ先も鋭く突き破る。

雷光三寸

突如として発生した戦闘に本部も大慌て、いまだ背振山を覆う包囲網は配置出来ておらず、その情報も夜間偵察機により報告される。首脳部は急ぎ配置を急がせる叫と、独断先行の責任問題を追求する怒声がこだましていた。

そんな首脳部を置いて現場の二人、如月と福岡は闘い続けていた。

如月は刃文を上に向け刃先を前に弾け飛ぶ、切つ先鋭く熊の様なネウロイの額に突き刺し、壮絶な笑顔のまま頭部をざくろのようにやすやすと上に切り裂き、そのまま返す刀で左袈裟に斬る。

「一つ！！！」

それを見計らつたかの様に左から新たなネウロイが如月の前に立ちはだかり、重心の落ちた如月の後頭部向け右爪を振り下ろす。

「ははっ！甘いわ！一ツ！！！」

如月は重心を左下に預けたまま左膝を抜き左に大きく回り一回転、そままネウロイの腰から下を両断しその回転力を弱めるどころか加速し、切り口左腰に右回し蹴りを叩き込む。

ネウロイは凄まじい勢いで吹き飛び、岩に激突し消失する。

その結果などお構い無しに次々にネウロイ共を一枚三枚と切り裂いていく、次々に量産されて行くネウロイの切り身は数が増え行くに連れ消えて行く。

本来の戦車での戦闘とまるで違う闘いがそこでは行われていた、火力と装甲で行われる戦車戦、敵と距離を取り行われる砲撃戦はそこなく、只々肉薄したたつ斬る。

日本古来の合戦がそこでは行われていた。

その闘いの脇で福岡も善戦していた。

迫り来る爪をネウロイの腕を自分の手で添わせそのままひっくり返し、零距離で顎から頭を散弾銃で吹き飛ばす。

膝を着いた状態の福岡に影が覆う、ネウロイが彼を押し潰す様に飛び掛つてくる。

福岡は両手を投げ出す様に前に転がる、一瞬前まで彼がいた場所に土煙が上がりネウロイがのそりと立ち上がる。

福岡は散弾を装填しつつチラリと後ろを見る、真後ろに影。背後と前にネウロイ、前方のネウロイが振り返るその瞬間後方のネ

ウロイが両手を振り降ろしてくる。

福岡は沈む様に右に反転、ネウロイの左側面に背中をぶつけ左手に握った散弾銃を後ろ手にネウロイの左側頭部に当て弾く。

そのまま頭部が斜めに吹き飛んだネウロイの背後に回り再度装填。消えて行くネウロイを踏み台に前に飛び、消えた福岡を探していたネウロイが首を上げ福岡をみつける。

だがその瞬間、目の前を眩い光が覆う。

突然も閃光に反応が遅れたネウロイの肩に着地、同時に重力と加速で得た力をそのまま頭上頂点から、頭蓋をかち割り銃口を咥えさせ内部で発砲する。

散弾銃を抜き飛び降りる福岡、彼の手には散弾銃と、カメラのフランシショの様な物が握られていた。

福岡も如月の様な華々しい闘い方では無いが、確実に敵を各個撃破していく。

あらかた始末が済み最後の一匹のネウロイの首が切り飛ばされる、その首は転がり福岡の足下まで来た。

彼はそれを片足で踏み付け。

「どうやら始末は終りましたね中尉」

「ふむ、つまらんな。これで終いか？」

如月は太刀を十時に斬り鞘に收める、福岡も足下の首を散弾銃で吹

き飛ばし、弾を装填し残弾を確認する。

その時中尉の無線が鳴り出した。

『やう言いなすんなや、今からお偉さんからの激文を送つてやるか
かね如月中尉』

「はつ！失礼しました連隊長閣下！」

その後無線相手に直立不動で受け答えし、頭を下げる中尉を見ながら少し和んでいると、俺の無線も鳴り出した。

『追い犬、追い犬、状況送れ』

「こちら追い犬、敵と交戦するも、それを撃破、送れ」

多少緊張し、無線の結果に安堵した神崎の声が俺のインカムに響く。

『了解、ご無事で何より。只今情報を、如月中尉に伝達中です、以上』

「追い犬了解、以上通信終り」

俺は通信を切り中尉に向き成る、中尉は真面目な顔で通信を聴いている。

途中俺の視線に気付き、手信号で全周警戒を下達する。

俺は了解を伝へ遮熱帽を被り直し、中尉の周囲を警戒する。

会話から察するにネウロイの核を発見したようだ、戦力から考えて次はそれの索敵又は監視だろう。

そう高を括つていたが、その予想をぶち破る言葉を耳にしてしまった。

『了解、核の撃破に向かいます』

俺はその言葉に耳を疑い、警戒そつちの内で中尉に振り向いてしまった。

首領

「首領

「聴いた通りだ曹長。場所は確認した、これから向かうが貴様は帰つてよい、男のクセには良い闘いだつたぞ」

「ちょっと待つた！核つたらさつきの雑魚とは大違ひだ、流石に中尉だけでは！つつか俺に帰れつてか！」

俺は驚きと怒りを同時に使う離れ業をかまし抗議する。

そんな俺に少し目を丸くしながらも、真顔でまたしても。

「そうだ先程の雑魚とは違う、判つているじや無いか。でわ私は行く、さらばだ福岡曹長」

「ちよつ！――！」

如月中尉はそう言い残すと、止めようとも近づく俺の頭上を飛び越えて行つてしまつ。

その飛び去る背中をざつする事も出来ず、俺はまた見送るだけ。

いや、断じて非な！

「そんな訳行くかよ」

俺は被り続けていた遮熱帽を脱ぎ捨て、如月の背中を睨み据え

「俺はあんたに、ウイツチ如きの女に――」

「負けるかよ！――！」

その叫に答える様に月光が彼を照らす。

そして一陣の風が彼の赤髪をなびかせ、閉塞空間から解放された短髪がなびく。

そして、その髪の中にピンと立つ犬の耳が、ぴくぴく動く。

『オイオイ良いのか、援護も無くボス戦なんてよ？』

今は木々の間を疾走する如月の無線に桂木が言つ。

『確かに中尉なら何とかなるかもだが、正直キツくないか』
木々の間から不意に襲い掛かる熊の様なネウロイを抜き様に斬り捨てる。

核に近づくにつれ、その数も増えて行くがただ斬るのみ。

「だが、あの曹長を連れて行つてもたいして変わらん」

『まあ確かに一般兵では上等だつたけど、無いよりマシだろ』
そんな会話の中、如月の眼前に一匹の熊ネウロイが襲い来る。

「随分肩を持つじや無いか、曹長の熱に当てられたか」

如月は速度を緩めず前に出たネウロイを横一文字に斬り捨て、切つ先を返しもう一匹を左下から右肩まで両断する。

『違うつて、たださ（笑）』

『女如きに負けるかよ！…！』

二人は同時に先程の福岡の言葉を叫んだ、強敵を前に如月と桂木はクスクス笑う。

『今時あんな事言つ奴が生きてたとわね』

「全くだ、時代錯誤も良いとこだ。ウチの曾爺様以来だあんな事を言う奴は」

『ハツハハ！児玉翁以来とは彼はデカくなるぞ！　おつとお喋りもここまでだ』

「その様だ」

如月は雪上滑る様に地面の土を舞い散らせ、制動をかける。
そして、その姿を表した。

大雨で崩れた山岳の割れ目、その山と山に挟まるようにヤツはいた。
そのネウロイは黒い硝子のようま甲を被り、半円の前身、五角形状の後体に細長い剣状の尾部。

七対の槍の様な触手、全長は六十m程。

その巨体を地上から十mで自己浮遊する、巨大兜蟹。

お互い数秒の睨み合ひ、巨大兜蟹は七対の硬質で鋭い触手を力チャカチャ鳴らせる。

如月は静かにそれを見据え、太刀を正眼に構える。

緊張の糸が張り詰める、一瞬の静寂後兜蟹の触手が如月目掛け突き出される。

その頃本部でも新たな動きが告げられる、急ピッチで配備を終わらせ包囲圧縮していた部隊からの連絡。

山狩りを実施するも、単発的な遭遇戦のみ、特に如月福岡両名の襲撃後その数も激減。

発見される熊ネウロイも、包囲隊に見向きもせざる一点にむかっていること。

その報告に首脳部は、この機に乘じ一挙に追撃戦を掛け短期決戦を決断、各部隊は包囲網を狭め一路ネウロイの核を目指す。

その報告を神崎は如月福岡に送るも不通、バイパスを変え桂木へ飛ばした。

「こちら本部、首輪送れ」

『つち、はいはい、こちら首輪どうぞ』

何やらい作業中だったのか、苛立ちを含んだ通信に多少驚きつつも、神崎はその旨を伝える、すると。

『なんやてえーーーー直ぐに停めさせろーーー』

無線機のマイクが暴れ出すかの様な大声に両手でアタフタと、体制を崩しそのまま後ろに倒れてしまう。

それを見兼ねた一人の首脳が無線を変わる。

「貴様何処の所属だ、止まれとはどう言つア見だ」

『うつさいわジジイ！止まれ言つたら止まれこの不能がー』

その瞬間、本部指揮所が水を打つたように静まり返った。

後ろで誰かがカップを落とし、割れる音が響いた。

爆心地にいた神崎は自分がこけた痛みより、その言葉とこの静けさに心臓を驚撃みされる思いだつだ。

恐る恐る、マイクを握り締めたまま微動だにしない首脳の顔を観る。

「ヒツ、ヒイイー！」

そこには顔を怒りに赤く染め、額の血管が浮き出し、数多の想いに無表情になつた鬼がいた。

そしてそのマイクからまとも油が。

『聴いてんのか不能ジジイ！立ちもしねえイチモツと意地なんかどうでもいいんだ！どうせ娘にも嫌われてんだろうが、ひとつと部隊を止める不能内弁慶が！』

それは油なんてもんじゃなかつた、今私の目の前でヒンテンブルクが大墜落した。

その後指揮所無線室は罵詈雑言と卑猥な言葉が飛び交う戦場とかし
た、流れ弾で傷付く中年兵士と顔を赤らませ逃げ惑う女性兵士。
そのせいで各部隊への連絡が滞り、結果として包囲網は一時停止。
私は命からがら地獄絵図となつた指揮所から這い出し、本部付のジ
ープを拝借し、逃げる様に一路坂本峠へ。

如月

指揮所が地獄とかす数分前、如月は兜蟹の繰り出す複数の槍と闘っていた。

常に蠢き不規則に休み無く繰り出される刺突を、紙一重で捌きつつも何とか斬り付けられ無いかと肉薄するが、あと一步、あと一步足り無い。

互いに一步も引かない攻防が続く、これを打開しようと後ろに跳躍し兜蟹の甲を斬るべく跳ぶ、だが。

「くつ、ビームか！」

空から強襲するが甲から雨あられと熱線が如月を襲う。

直撃して来る熱線を叩つ斬り、足場に小さな魔方陣を出現させ右へ左へ飛びながら避ける。

「！」

熱線の弾幕を不規則な跳躍で捌き、如月の切つ先が甲を穿つ、はづだつた。

その正に斬りかからんと振りかぶる如月に向け、真横から熱線が襲う。

如月は身体を無理矢理捻り、それを避けるも。

「くつ、掠つたかつ」

右脇の布が焼け焦げ、真っ白な肌に紅い線が入る。如月はそのまま倒れる様に地面に落ち、着地する。

兜蟹は落ちた如月目掛け体を回転させ攻めたてる、何とか跳びながら逃げる如月に木々の間から次々に熱線が降り注ぐ。

跳ねては避け、熱線を斬り払いながら逃げるも。

「くつ！ あんな不意打ちに屈するとは」

とうとう岩壁へと追い詰められる如月、だが彼女の眼に絶望は無い。来るなら来いと気合を込め、太刀を最上段に構え兜蟹に向け走る。

「チユエストー！！！」

それを真っ向から迎え撃とうと、兜蟹の槍が唸りをあげる、その瞬間。

兜蟹と如月の間に突如煙が立ち込める、兜蟹は構わず触手を突き出す、次第に消えゆく煙の中、確認するように触手をもたげる兜蟹。その触手の先には如月が突き刺さっているはずだった、だが誰も居無い。

兜蟹も周りを見回すその時、兜蟹の甲に鉄片が当たる音が三つ、それと同時に。

谷間に響く爆音と閃く三つの火柱。

さしもの兜蟹も爆風に負け、地面に叩きつけられる。

その光景を、中腹で見つめる二人の姿、一人は如月。

そして負傷した如月にさらしを巻くのは

「貴様、どう言つつもりだ福岡。私は帰れと言つたはずだが」
慄然とした表情で腕を組み真っ正面を見たままの如月に、福岡はこれまた。

「言つたでしょ、あんたに負けないってね。完了」

さらしを巻き終え如月の肩を叩く。

「気に入らん、気に入らんぞ貴様」

決死の覚悟で突撃した如月の目の前で煙幕を張り、そのまま横やいから搔つ攫う様に肩に抱き上げ走り出しど。

岩陰から飛び上がり、岩壁の突っかかりを足場に跳ねながら登り、行きがけの駄賃に手榴弾を放おつたのはこの男。

「だいたい貴様先程の動きは何だ！？」

そこで始めて如月は福岡の顔を見、そして頭の耳を見た。

「話は後だ、アレを見る」

福岡の指差す先に何やら蠢く兜蟹、如月も何かと良く観察すると。

「アレは！？ヤツめ分裂を」

それは爆発で弾けた兜蟹の細胞が蠢き、新たに形作られていく光景

だつた。

その姿は今までの熊型の姿だつたが、しかし。

「おつと、ヤバイ」

その時一匹の熊がこちらを向き顔が光つたかと思つと、福岡が下を眺める如月の襟首を掴み引っ張る、その瞬間ついさつきまで首があつた場所にビームが一本突き抜けていく。

「因みにさつきから横から攻撃していた奴等はアレだ」

少々混乱している如月を置いて福岡は急ぎ桂木に連絡を入れ、細胞分裂する事を手短に説明終える、その時状況を理解した如月が福岡に意見を求める。

「それで曹長、君はアレをどうする」

福岡は下の兜蟹を注視しながら考えを述べる、あの兜蟹は細胞分裂中は動けないようだ。

「見たトコある程度の塊でないとあの新熊には成らないようだ、通常兵器はこっちが危険。分裂できない程細かく碎く」

福岡は自分の腕に装着された鋼鉄製の籠手をかざす。その答に如月は。

「全く、直情主義馬鹿が考える作戦だな」

福岡は自信満々に答えた分、少々凹む。

「だが、今のトコそれしかあるまい。行くぞ！」

その瞬間そつれまで動きを止めていた兜蟹から、一斉にビームが一人がいた中腹に集中する、

轟音と共に砕け落ちる岩と共に一人は駆け出す。

対空砲火の如くビームは一人を襲う。

如月は魔方陣を足場に跳ね回り、福岡は岩壁をまるで地面かの様に走る。

「中尉！こちらで雑魚の始末をして来ます」

「そうか、露払いを頼む！」

その言葉を聞き福岡は林の中へと突っ込んでいった。

福岡

枝を巻き込みながら突如として現れた福岡に向か、その区域にいた新熊は一斉にビームを放つ。

木々が赤く染め照らされ数十の赤化光線が、福岡の身体を突き破らんと殺到する、だが。

「当たらんよう！」

ビームに照らされるも当たらない、地面すれすれを低く犬が四つ足で疾走するかの如く走る彼は、ただの障害物かのように熱線の下を抜けて行く。

それを必要に追尾するビームも右へ左へ。

木々はなぎ倒され新熊達の視界を覆う。

福岡を見失つた新熊達は辺りを見回す、その時倒木の上を何かが跳ねた。

「何処見てんだおい！」

倒木を踏み台に飛び上がった福岡はその落下速度に全体重を乗せた飛び蹴りを新熊の頭部に浴びせる。

その蹴りで頭が消し飛ぶ、着地した福岡に向け熱線が集中するが、それより早く彼は前へ飛び出しビームを放つ新熊の懷に入り込み強烈な右胴突きを放つ。

新熊のビームが弱々しくなると同時に新熊の背中が爆ぜた、福岡はその新熊の左腕を掴み一本背負いの様に投げる。

飛来する仲間の残骸に巻き込まれる新熊、彼等はビームを放つのを止め次々に福岡に襲い掛かる。

「テメエ等の手の内は読めてんだよ」

襲い来る新熊の爪の斬撃を前で受ける、懷に飛び込み飛来する新熊の腕の肘を掴み空いた手で腹を滑らすように拳をかち上げる。

拳は顎から先を爆碎する、怒り狂つたのかその新熊ごと斬り裂かん

と周りの新熊達が爪を振る。つ。

「無駄なんだよ！」

福岡は反転し正対した新熊の降るう爪と同角度で斜めに拳を突き出し、身体ごと飛び上がる。

福岡の鉄籠手と新熊の爪が接触した瞬間、その爪は手首からもげ飛び放物線を引いて後ろに飛んで行く。

福岡はその勢いのまま新熊の後頭部を両手で掴み一気に身体を加速、顔面に膝を叩きつける。

硬いものが割れる音が響き中身をぶちまける、勢いそのまま背後に彼は降り立ち隣にいた新熊の脇腹に肘鉄を叩き込む。

その身体はくの字に曲がり反対側の脇腹が、沸騰する様に泡立ち破裂する。

その光景に怯えたのか、思考を巡らせているのか新熊達の動きが止まる。

背後で崩壊して行く残骸を背景に、福岡は

「お遊びはお終いだ、消し飛べーーー！」

その双眼に赫い焰が宿る。

福岡が新熊を相手している間、如月も兜蟹と爆発で生まれた新熊と闘っていた。

落下と同時に直撃弾のビームを裂きながら、その熊を叩つ斬る。周りに水分をはらんだ斬撃音が響く、真つ二つに両断した新熊が左右に別れ消えて行く。

「さて、仕切り直そうか。蟹野郎」

ぬぐりと立ち上がり太刀の切つ先を兜蟹に向け、声高らかに如月は宣言した。

その声を待っていたかのように一斉に襲い来る新熊と兜蟹、餌を求める魚の様に殺到する新熊を跳んで裁く、だが一斉に顔を向けた新熊からビームの束が襲い来る。

如月はそっと眼を閉じ、力強く開く。

その瞬間如月の太刀に一際は大きな蒼い炎が立ち昇る、如月は飛び来るビームの束ごと。

「チエストオウー！！！」

炎で巨大化した刀身を、脇から一気に横一線に振り抜く。赤色の熱線は蒼き炎に駆逐され地面で爆ぜる、炎に飲まれた敵は跡形も無く消え去りる。

そして声が響く、燃えゆく蒼き炎の中から黒い人影。

「幕は降りた、終演といこうか」

如月は炎の化身の如くその蒼き炎から歩みでる。

その姿に兜蟹は雄叫びを上げた、岩場に轟くその叫びは山を揺らす。

兜蟹は先の戦闘と違い、猛烈な勢いで如月を追い立てる。懷に入る如月に触手を多方から斬撃刺突織り交ぜ嵐の様に迫る、懷から飛び出した如月めがけ巨大な尻尾を振り回し追撃、跳び避け様ものならビームの雨霰。

流石の如月も今は防戦一方、もう一度懷に飛び込もうにもあの尻尾と回転技が邪魔をする。

「くっ！」

考えをまとめている間にも、熱線が襲い来る。
策が無い訳では無い、だが。

「取り敢えず、その尻尾は邪魔だ！」

如月は飛び来るビームを紙一重で避け続け、兜蟹に肉薄する。
迫り来る如月に兜蟹は巨体を震わせ、巨大な刃と化した尻部で迎え撃つ。

「貰った！」

真横から猛速度で振るわれる尻部に、如月は叩つ斬る様に真っ向から太刀を振り下ろす。

「つくつ何！カア！」

均等するも兜蟹の尻尾は硬く如月の太刀は弾き返され、そのまま身体ごと吹き飛ばされる。

野球ボールがバットで打たれる様に真っ直ぐ岩壁目掛け一直線。

「中尉イイイ！！！」

その時中腹から飛び出す一匹の犬。

それは如月の背中を抱き締めるとそのまま、岩壁に激突する。

「グウヘエッ！！！」

岩壁に亀裂が入り、一人を中心に方円状に陥没する。

崩壊した岩が崩れ落ちる中。

「きつ貴様何だその声は！まるで私が重いようではないか！」

「ちょい待ち、助けてそれかよ…」

福岡がクツショソとなり立ち直りが早かつた如月は、顔を朱に染め左手を上げ背後の福岡に抗議する。

身体の形のまま岩に埋れた福岡も、痛みに両目をキツく閉じ首をもたげ左右に振りながら咳く。

そんな茶番劇に兜蟹が付き合ひう訳も無く、即座にビームを放つて来る。

今度こそ完全に崩壊していく岩壁の砂塵に巻かれながら、今だ茶番は続いていた。

「だいたいあの速度で受け止めたら普通死んでるつてんだよ！悶絶ぐらい許せよ」

「いいや、許さん！婦女子を抱き締めておいて悲鳴など、この軟弱者め恥をしれ！恥を！」

二人は左右に兜蟹を挟む様に走り込み、敵を攪乱しながら疾走する。

「だいたい貴様が遅いからこう成ったのだ、責任は全て貴様に有るぞ曹長！」

兜蟹が放つビームを避け、懷に入り込みながら如月が叫ぶ、反対側の福岡も負けじに。

「コッチは生身だぞ！無茶言うぜ、これでも急いで来たんだ労いの言葉も無しかよ」

背を見せた兜蟹の尻部の付け根を両手で掴み、地面を蹴り上げ腕力で加速させ付け根の関節に猛烈な膝蹴りを叩き込む。

その打撃で関節の外殻が碎ける、背後の攻撃に上体を持ち上げた兜蟹の懷に。

「貴様は私如きに負けんのだと、ならばあれしきが何だ！」

上体が空き隙ができた懷の触覚に、如月の太刀が蒼く光りながら断絶するかの様に迫る光線が引かれ。

兜蟹の声に成らない叫び声が響き触手が全て細切れになる。

「ああチクショウ！後で覚えてろよ」

膝蹴りを放ちそのまま反転しながら翔び上がった福岡はトドメとばかりに、碎けた関節目掛けて斧のように踵を振り落とす。

その時先程より凄まじい叫びを上げる兜蟹。

「うるせえぞ！蟹が泣くな！！！」

二人は同時に怒声を上げ、トドメに入る。

如月は太刀を最上段に構え、長い柄口の上に右手を添え、握る。

その瞬間力ッと開かれた眼に蒼き炎が燃え上がり刀身が燃え上がりその炎が大きく、そして硬質化してゆく。

その刃は森を突き抜け、そびえ立つ。

その瞬間傷だらけのユーツトが限界を迎えた様に、徐々に崩壊していく。

「受けてみよ、私の示現流を！」

福岡も？いだ尻部を掴み上げ頭上で回転させ、その先端を傷口目掛け刺し込み。

「これが、俺の拳だあ！！！」

叫びと共に右腕が燃え上がり、その炎は拳の前で凝縮してゆく。

あたかも太陽が出現したかのように辺りを一瞬橙に染める、だがその光をも取り込み闇に赫い赫い玉が浮かぶ。

そして、二人は渾身の一撃を叫ぶ。

「チエストオウー！！！」

日の出

神崎はその光を、桂木と共に見た。
突如として出現した蒼き光の刃。

それがうち降ろされたその瞬間、一本の火柱が龍のよつて空へと舞い上がった。

それまで罵詈雑言を叩き付けていた桂木さんも、通信機片手に歩いて来て。

「…蒼いのは中尉だが、あの炎は誰だ？」

何やらまだ叫んでいる通信機をトラックの荷台に放り込み、興味も無く成ったのかタバコを咥えて、そのまま踵を返して後ろに下がって行かれました。

昨日の昼から行われたこの作戦はいつして朝日と共に幕が降りました。

その後ネウロイの核が破壊されたと思われる地点で、巨大なクレーターの端と端でお二人、如月中尉と福岡曹長を発見。
お一人とも相当お疲れのようで、お天道様を頭上に大の字で熟睡しておるとこ、援護の包囲隊の方々に保護されました。

「…っふ、ふふふ」

「神崎、貴様何が可笑しい」

「いいえ、そつそんな。…ふふふ」

ダメです、無理です、お腹がよじれる。

場所は三養基空軍基地の医務室、私は曹長が起きたと聞きましたの医務室に来たのですが。

「……」

そこには患者服に着替えた曹長が、ベットにあぐらを組み腕を組ん

でいました。

「あつ曹長…！？」

でも、でも、仕方が無いんです。

「…神崎か」

おつ男の人に、けつ獸耳と尻尾が。

私はその場でうずくまり口を押さえるしか有りませんでした、だつてえ。

「くつくく、へつへつく、苦しいい（笑）」

だつて可笑しいんですもん、ピクピク動く赤毛の耳、怒つていらしているんでしょう、ベットを叩くフカフカの尻尾。

曹長は丹精な男前な顔立ちをされている分、それなのに、それなのにですよ。

「なつ何で、獸耳と尻尾があ、ふふふ

苦虫を噛み潰したような表情に、本人も気にされているんでしょう

犬歯を剥きながらも顔を赤らめています。

私はなんとか持ち直し、今曹長の隣で報告を終えたといひです。

「…そつかご苦労、戻つていいぞ」

「はい、では失礼し「いやまだ終わつて無いぞ曹長」

私が言い終わる前にその言葉が飛び込み、扉が開かれます。

「元気そうだな、曹長」

現れたのは幹部制服姿の如月中尉、その脇に封筒を挟んでいた。

「…どうも、お陰様で」

「そう怒るな、せつかくの美人が台無しだぞ」

如月は二タニタ笑いながら福岡の耳と尻尾を指差す。

それにつられ神崎が急いで口を抑え窓際を向く、福岡は悔しいらしく両膝に乗せた手をワシャワシャさせ、歯噛みする。

「まあ待て、何もからかいにだけ来た訳では無い」

そう言うと如月は脇の封筒を投げてよこす。

福岡はその封筒を開け、中の書類を取り出す。

「…人事移動？…！」おい中尉、これははどうでもいいです

「そのままだ、明日出る準備しておけ。ああ君もだぞ神崎伍長」

「えつ！あたし！」

そう言い残すと早々に部屋を後にする如月、その背に舌打ち一つ送った福岡は、脇で驚く神崎に封筒を渡す。

あたふたと封筒から書類を取り出し、読む。

「えつ！ええええええ！」

人事移動通達

右の者、部隊移動を言い渡す。

福岡 陣 ? ? ? 陸軍曹長

神崎 瞳月 ? ? 陸軍伍長

配置異動先

陸軍省直轄

同盟国派遣団 統合派遣隊

自戒予告

「そつ曹長！いきなり部隊移動なんて聞いてませんよ～（泣）」

「ええいシユキッとせんか神崎、俺だつて聞いてねえよ。取り敢えず行くしかなかろう」

「だいたい同盟国派遣団つて何なんですか（泣）」

「確かに、ええ～とう…」

「なに遠い眼して誤魔化してるんですか！つづか知らないんですか

曹長！」

「うつうひるせい、座学は…苦手なんだ」

「ちょっとマジですか！本気と書いてマジですか！」

「大丈夫だ神崎、行きや何とかなる！扶桑軍に退却は無い！着剣良

／＼前へ！！！」

「ちょっとーどこの行くんですか曹長！待つて下さいよ曹長！」

次回 獣耳

第一話 姦し娘

姦し娘

複数の線路が張り巡らされ、数多くの汽車が往来を繰り返す埼玉は大宮駅。

関西からの夜行列車から降りる乗客の中に陸軍の軍服を着た女性達が降り立つ。

「ふつああ、長かつたあ。だから汽車は好かんのや」

着崩れした白衣に戦闘服姿の女性は、青息吐息も盛大に吐き出す。

「そうボヤくな桂木、後は迎えのトラックですぐに帰れる」

背筋も美しくタラップを降りる、太刀を引っ提げた幹部制服の女性兵士。

「ですが乗り換えばかりで…、私も疲れましたよ如月中尉」

その後ろから、寝癖が付いた洋髪を押さえながら降りる童顔の女性兵士。

「贅沢を言つた神崎、貴様達は一等客席だつたではないか。俺なんぞ貨物室だぞ」

自分より大きな背嚢を背負い、両脇両腕に衣類鞄や雑のうやらをぶら下げる遮熱帽の男性兵士が荷物を所々でつつかえながら出て来ようとしていた。

「女三人の個室に、男の君を入れる訳がなかろう曹長。無駄口はいいから早く荷物を運び出せ、民間人の皆様に迷惑だ」

「そやそや、犬耳の男なんてまんま狼やん。睦月も氣いつけなばつくり穢されてまうでえ」

「ええっ！？ 福岡曹長狼だつたんですか！？」

口に手を当て驚く神崎の肩に手を置きながら如月は

「そうだぞ伍長、男は皆狼だ。年頃に成つたら氣を付けんとな」

「幼子好みもいるしなあ、睦月は童顔やから。今晚辺り…」

怪しげに笑いながら桂木がそんな事まで言い出す。

「そんな曹長、信じていたのに…」

世も末の様な瞳で、扉口で引っかかっている福岡に呴く神崎。

そしてついに

「黙つて聞いてりやあピイピイピイピイと、…姦しいんだよテメエ等よお！…！」

「ははは、多怖。犬が吠え出したか、噛まれちゃかなわん、行こうか二人とも」

「ホンマや、変な病氣でも移されたらかなわんしな。行こう行こう睦月」

「あははあ、すいません曹長。出口で待ってますんで」

そう言い残すと福岡を置いて出口へ向かう姦し三人娘、福岡も引っかかった背嚢をどうにかこうにか頑張るが。

「おいコラ！自分の荷物ぐらい持つて行け！…ふつふんうう…！」

そんな叫びに如月がチラリと振り向き話し出す。

「まったく、一度降ろして運べば良からうに」

「頭に血が昇つて判つてないんよ、兄さん直情馬鹿やから」

「そんな事言つちやマズイですよ。本人行けると思つてるんですから」

何気に一番酷い事を神崎がこぼし、それまた笑い出す三人であった。

その後ブチ切れて意地で全部の荷物を抱えたまま飛び出した福岡は、出口へ向け突き進むがこれまた改札口で引っかかり学習しない奴と大いに笑われた。

散々笑われた拳句、迎えに来たトラックの荷台にそのまま荷物を積み込むよう如月に命令される。

何やらその姿に感じ云つたのか、迎えの運転手が荷台の降板を降ろしながら。

「あんたも大変だねえ」

「…言つてくれるな」

そしてトラックは走り出した。荷台の左右に取り付けられた乗車員用の左側長椅子には福岡、その向かいの長椅子に桂木、神崎の三人、トラックの車長席に如月中尉が座っている。

向かいに座る二人は何やら前回の背振山での作戦時、突然部隊通信が不能に成った時の話をしているようだ。

あの時俺は戦闘中で無線を切っていたが。

「どうした、あの時不能に成った時の話か？」

俺は少し気になりその会話に入った、何故か神崎は赤くなり桂木はニタリと笑つた。

「あつれえ兄さん、不能の話し知つとるん」

何故かニタニタと笑いながら話を振つて来る桂木に

「いや少しだが、突如不能に成つてその後立ち直らなかつたんだろ？」

そう言つと一瞬半笑いで目を大きく開くと腹抱え、足をバタつかせながら大笑いする桂木、その脇で背もたれに顔を埋め肩が震え出す神崎。

俺は何が可笑しいのかよく判らず顔を歪ませていると、桂木が笑いながら。

「じつ実は、あの騒ぎうち等の通信のせいなんよ

「…？、何て連絡したんだ？」

「いやね、部隊を止めい言うただけやで」

「それだけですか、誰れにだ？」

それにチョット考へてゐる桂木の代わりに、涙目の中尉が代わりに答えた。

「あの、本部中隊の中隊長ですよ、確か名前があ…」

三人で上を向いて考えだす。

桂木が白衣のポケットから紙巻タバコを掴み、咥えながら火を付ける。

名前が出てこない、思い出そうとしていた俺はついボソリと、

「ああ、あの牡蠣風呂中佐ねえ…」

ついあだ名を口走った俺を、向かいに座っていた一人はギョッとした目で見る、火を付けたばかりのタバコがポトリと桂木の口から落ちた。

その瞬間周囲もかえりみず一人は抱腹絶倒、大爆笑し始めた。流石にこれには如月中尉も何事かと、操縦席と荷台につながる窓を開け聞いてきた。

俺は小首をかしげるのみ。

何とか言葉を出そうと桂木は頑張るが、笑いながら牡蠣風呂牡蠣風呂と言うのが精一杯の様だ。

神崎など座っている長椅子に突つ伏し顔も上げられない。

どうやら通信手同士で何か在った様だが、俺と如月中尉は眉をひそめる他に無かつた。

そんなこんなで、大宮の市内を走る事數十分。存在も威圧的な歴代の火砲や戦闘車両が並ぶ表門を抜け、大宮基地内へと進入する。

荷台乗務員席に座る福岡は、向かいで笑い疲れて寝静まっている桂木と神崎を起こす。

トラックは酒房と食堂の前を通過し、真新しい司令部が建ち並ぶ区域へ入つていく。

向かいに座る桂木はやつと帰つて來たと、外を見ながら大あくび、新参者の神崎などどこを見て良いのかと落ち着かない様だ。

福岡もあまり周りは見づ、遮熱帽を深くし腕を組む。

そうしている間に車は一棟の司令部前で停車した、門柱の看板には小さく右上に、

陸軍省直轄部隊

そして大きく名が、

同盟国派遣団 統合派遣隊

と刻まれていた。

自己紹介

自己紹介

緊張した面持ちの二人を引き連れ、如月と桂木は慣れた足取りで階段を登つて行く。

至る所で幹部と遭遇し直立不動で敬礼を繰り返す福岡と神崎と引き換え、流石は原隊と歩きながら軽く挨拶して行くのみの如月と桂木であつた。

そういうしている間に最上階の四階、前を歩く二人が扉の前で立ち止まつた、扉の上には表札が掛かつており、隊本部とある。立ち止まる一人を置いて、如月が扉開き中に入つていく。

「今戻った！」

「いやあ、やつと着いたよ」

本部室に入つて行く一人の後から背筋を伸ばした福岡、神崎両名が直立不動で入る。

「失礼します！」

「本日付をもつて配属された福岡陣曹長です！」

「同じく神崎睦月伍長！」

二人は顎を上げ部屋の天井を睨む様に宣誓する。

だが、

「はいはい、判つているつて

上座の机に腰を掛けながら如月が一人を手招く。

「いやあ、初々しいねえ！」

その左脇すでに机に座り込み片肘を付く桂木。

新参者の二人はやつとこの部屋に自分達四人しか居ない事に気づき、失敗した恥ずかしさに頬を染め上座の如月に向かう。

「まあ改まつた挨拶もまだだつたな。わたしの名は左保、如月左保

中尉だ、この隊の隊長だ。そして彼女は

促された桂木が、首をもたげ手をヒラヒラしながら。

「弥生、桂木弥生軍曹や。武器や装備関係の技術技師やつとるよ」

「後四人程隊員がいるが別件で遠征している、帰つて来たら紹介しよう。まあ取り敢えず君達を歓迎しよ福岡曹長、神崎伍長」こうして新たな部隊に歓迎された一人は、早速そのまま如月中尉より役職を拝命した。

福岡曹長は斥候要員兼隊長付通信手、神崎伍長は隊本部通信手兼任レーダー観測員。

「まあそう肩肘を張らず円滑に励んでくれ。それと曹長、君は今から桂木軍曹が検査をするから、体育服装に着替えたまえ」

労いの言葉を受け、一息つこうと思つていた福岡に早速嫌な予感が走つた。

「…検査、ですか」

苦い顔をした福岡の脇で、何やら電極や測定器をゴチャゴチャ取り出す妖しい顔の桂木。

そのまま逃げ去りたい思いを何とか思い止ませ、福岡は自分の荷物を取りに部屋を出た。

短パンにランニングシャツを着用し、いつもの遮熱帽を被つた福岡が隊本部に戻ると、部屋の真ん中に、

「…あの中尉、これは…」

何やら巨大な電源装置から伸びるケーブル、それは木製の背もたれ椅子に続いており。

ケーブルの先から色取り取りの電線が枝分かれし、毛細血管が身体を覆う様に椅子を取り囲んでいた。

何やら忙しそうに動き回る神崎の脇で、如月は答えた。

「君もあまり人には観られたくないだろ？と、ここで検査する。なにこれは我が隊自慢の魔道装置だ」

そう言うと高笑いしだす如月、それにどう答えたものかとげんなり

する福岡だが。

背後で金属製の物が閉まる音が聞こえ、ゆっくり振り向く。

「さあ、とつと剥いちゃって、一段飛ばしに大人の階段登っちゃおうか。兄さん」

そこには後ろ手に鍵を閉め、禍々しい笑みを浮かべた桂木がいた。福岡は生唾を飲み込み後ずさる。

だが、後ろにも邪悪な気を孕む者が居た。

不意に遮熱帽が奪い取られ、赤毛の短髪とそれと同色の犬耳がピンと顔を出す。

その喪失感に気を取られて居ると、突如激痛が走る。

身体は仰け反り爪先立ちに成りながら何とか後ろを見る。

見事に右手首を捻り上げられ、背中でくの字に関節を極められた腕。

「ちゅ、中尉何を！」

背後で左手で関節を極め、右手をそつと肩に添えた如月は、暗い笑を称えつつ。

「何、逃げられても困るんでね」

そのまま極められたまま椅子まで連行される、行き良い良く手首の関節が戻され身体が反転し、そのまま尻餅を付く様に福岡は椅子にケツを落とした。

その瞬間トラバサみの様に鉄の帶が身体を挟む。

衝撃で打ち付けた後頭部を合図に額の上、最後に飛び出し手足に絡みつく半円の鉄板。

その帶が手すりと椅子の脚に引っ張られ、完全固定してゐる福岡。それを見つつ満足気な二人と、その後ろで眼をつむり謝る様に手を合わせる神崎。

「ほな、やりましょうか。なに、兄さんはなにもせんで良いけに。私がしてあげる」

そう言つとポケットからタバコを取り出し口に咥え、手に絶縁手袋はめる。

両手に握ったケーブルをスパークさせると、その火花でタバコを灯す。

大きく含んだ紫煙を、福岡に吹きかけたその瞬間、そのケーブルを一気に押し当てた。

一瞬の出来事に身体中の毛穴が開き毛が逆立つた。

変化

吹き付けられた紫煙に顔を歪ませた瞬間、脳天からつま先まで一挙に仰け反った。

押し付けられたケーブルから全身を駆け巡る稻妻。見開かれた眼が徐々に紅い光を放ち、食いしばつた犬歯が鋭さをます。

部屋中に低周波と福岡の低い唸りが響く。

「来たで来たでえ！」

ケーブルを押し当て続ける桂木は変化し始めた彼を見つつ、マッドな笑みを浮かべる。

隣に立つ如月も、興味深く胸の前に腕を組み右拳を口に当て口角を上げている。

今や福岡の姿は牙が一倍に伸び、毛羽立ち逆立つ獣耳、背後では赤毛の尻尾まで出て来ている。

福岡は暴れ狂う力の激流に揉まれながらも、激しく脈打つ高揚感、荒れ狂う力に。

彼は今歡喜にも似た喜び、その果ての破壊と再生。身体を取り巻く破壊の奔流に高笑いしていた。

三日月の様に口が釣り上がり、瞳が橙に光り出す。

その時後方の機械を操作していた神崎が、表示された数値を書き写し小走りで桂木に見せる。

「！？… やるじゃない」

見せられた数値に一瞬の驚きを表すも、ニタリと笑う。

だが神崎はこれ以上は危険と進言しようと。

「ですが、これ以上は「うつさいわー」とっとと出力上げいー！」

「はっはい！」

吠えられ尻尾を巻いて操作パネルに飛び付くが、メモリは振り切り

これ以上は上がらない。

「桂木さん！これ以上は無理です、出力最大限です！」
「まだや！下のボタンを押せえ！！」

その声に神崎は出力レバー下のボタンを叩く。

その瞬間、福岡が椅子ごと跳ね事務所の窓ガラスが吹き飛ぶ。
「いかん！」

その瞬間如月が桂木の襟首を掴み、神崎に飛び付いた。
三人が地面に伏せたその時、福岡を中心に光が弾ける。
隊舎を揺さぶる爆音が轟、黒煙が割れた窓から登る。

その爆音に、隊舎周辺に人が集まり出した。

「おい、何が有ったんだ？」

「いや何でも爆発だろうが、……ああ、あそこか
？」あの部屋は確か、派遣隊の事務所だつたか

「あいつ等帰つて来たんだつけか」

「居ない間は静かだつたのにな」

「まあ、何時もの事だな。魔力光も見えるし帰るか」
そう言うと皆、そうだそudsだと言いながら帰つて行く。

爆発が起こつた事務所の真下の植え込みに、一つの注意書きが書かれている。

【頭上派遣隊、注意。これ以上先自己責任】

黒煙が視界を遮る事務所内で、一人を護るように覆い被さつていた
如月が体を起こす。

魔力を使つた様で、垂れた犬耳が現れていた。

「二人共、大丈夫か？」

下で伏せていた二人も動き出す。

「あたたたた、いつやあ久々の大爆発やつたなあ
腰をさすり頭を押さえながら、桂木が立ち上がる。

「…あたし、…生きてる」

あまりの出来事に茫然自失になつた神崎は、そのままへたり込む。

「曹長、無事か！」

二人が取り敢えず無事な事を確認すると、如月は黒煙の先。福岡が居るであらう方向に視線を向ける。

如月は危険を感じ、咄嗟に福岡を囮んだ防御用魔方陣を消す。

先程声を掛けたが、煙で前が見えん。

あの程度の爆発で死ぬような奴では無いが。

「…何が久々の大爆発だと桂木」

黒煙の中から彼の声が聞こえる、ビリや無事の良いだ、まあ久々ご立腹のようだが。

「なに言つてんねん兄さん、実験には爆発はつきもんや」

詫びに入る訳でも無く、さも当然の様に胸を張る桂木。

「まあ、そうだな。それに曹長もこれくらいでは何ともなからう?..」

如月も安堵しながら言葉を放つ。

先程の爆発で内部が吹き飛んだ魔道機械の隣でへつたつていた神崎も、涙目で如月の隣に立ち。

「うう~、曹長すいません。まさかこんな事になる……へつへひえええ！」

室内に充满した黒煙が割れた窓から風に乗り、徐々に視界が良くなつたその時。

神崎はあわあわと福岡を指差し、震え出し。

「おつお狼男…」

「おい！神崎！しつかりせんか！」

いきなりそう言い残すと隣で立つたまま息を失つた神崎を如月が支える。

「神崎、今更獸耳や尻尾くらいで…」

室内の煙がほとんど吐き出され、視界が確保される。

福岡も三人を見据え、倒れる神崎にため息が漏れるが。桂木も何故か目を見開き、如月の肩を叩いている。

「うん、どうした。曹長がどうか…」

「何ですか、中尉まで」

「おい、曹長。何だその格好は？」

「は、何って。爆発で服が弾け……」

如月と桂木の驚いた顔に、福岡は疲れながらも我が身を見る。

鋭く尖つた爪、腕を覆い尽くす赤毛の体毛。

頭を振り目に入ったガラス片に映し出された自らの姿に。

「な、なんじやあこりやあ！！！」

福岡の姿はいまや完璧なる狼男へと変貌を遂げていた。

放電

放電
そして数分後。

割れた窓から空を眺める如月と、事務所中央で正座している狼男。それに巻尺で身体の寸法を測つて行く桂木の姿、部屋の片隅では新聞紙の上で寝かされた神崎と機械の残骸等々。

「今日もいい天気だ」

「…中尉、落ち着いていらっしゃいますか」

「おっと兄さん、ちょっと立つてな。足回り測るから」

「おつおつ…」

福岡が変化を遂げた後、取り敢えず神崎を寝かせると好機の目で身体中をいろいろ測り出した桂木。

当初は驚くも現実を見ないためか、疲れた笑みを浮かべ外を眺める如月。

福岡も我が身なれでこの様な事は始めてで、尻尾も獸耳もズーンと垂れている。

そんな彼にお構い無く、嬉々として身体を測定し図版の容姿に記入して行く桂木が。

「よつしゃ、終わつたでえ兄さん。大きさ的には一割増しつてどいやね、後の数値は今は分からんからおいおいや」

「…そうかあ…」

「なあに辛氣臭い雰囲気出しどんねん、大丈夫やてえ。ほな中尉、どうしますう？」

沈んでいる狼男の肩をバシバシ叩きながら、如月に意見を求める。

「…そうだな、そのままで問題が有るし。いつちょ戻してみようか」

「えつ！ 戻れるんですか！」

あまりにも簡単そうに言われた言葉に、つい言葉をあげてしまつ。

それに答える様にくるりと如月が振り返り。

「なに、今日の検査は魔力えの飯能と君の魔力容量を見る為の事だつたからね。見るからに急な魔力供給に暴走したんだろう、なら過剰分を抜けば」

「そういうこいつちや、兄さんも抜くもん抜いたら誠君やろ」何やらまた桂木がいたらん事を言つてゐるが、白けた目で視線を飛ばすが気にしない。

そのまま機械の残骸に向かい、何やらテカイ車用バッテリーの様な物を引きずり出す。

「桂木、なんだそれは？」

「ふあ、ああこれな、とりあえずは魔力の蓄積装置。まあ見たまんまバッテリーや」

そう言うと何やらテスターの様な物を当て、確認作業に入つて行く。「どうだ、いけそう？」

「…うんまあ、丁度すっからかんやし、いけるやろ」脇から覗いて居た如月と、心配そうに見つめる狼男（福岡）を尻目にさつさと作業を進める。

何所からか持ち出したケーブルを端子に固定し、その端を福岡に渡す。

「?、桂木。これでどうしろと?」

「はあ、兄さんそこから魔力を吐き出すんよ」

「ようはバッテリーが干上がつた車を動かす事と同じだ曹長」

「…ふむ、成る程。では！」

二人の説明に取り敢えずは納得した福岡は、ケーブルの剥き出した鉄線部分を左右の手で握り締め、両手に魔力を集中させる。すると、徐々に赫い雷光がケーブルを渡り出す。

「お、上手く行きそうだな」

「うんまあ、考えだけなら年少学校の理科やけどな」

そんな事を言いつつ、二人は福岡の背中を見ながら成り行きを見守る。

初めは変化も現れなかつたが、数分すると。

「お、やつと抜けて来たな」

桂木は図版な挟んだ容姿に、その様子と時間を記入して行く。
福岡の身体は本来の大きさに戻つて行き、踵が人の物に変化し毛が消えて行く。

掴んでいた腕も爪が引っ込み、通常の状態に。

「うつ…あれ、あたし」

その時丁度残骸の脇で寝ていた神崎も目を覚ます。

「起きたか、どうだ大丈夫か？」

歩み寄る如月を見上げ。

「はい、大丈夫です。あつそう言えば曹長は…」

思い出し一拳に立ち上がった神崎に苦笑しつつ、指差す。

「なに、心配するな。彼ももうすぐだ」

指ささてた先には、もうほとんど通常の状態に戻つている福岡がケーブルを掴み気合を入れている姿だった。

「はあ、良かつたです」

二人は福岡の後ろで記録をとつてゐる桂木の元に行き、丁度最後のしつかりが消え去つたが、獸耳はそのまま。

「よし、曹長もういぞ」

如月の終了の声に手を離し、残心を取る。

そのまま後ろを振り向くが、その時履いていた短パンの紐が切れ落ちそうになるのを必死で掴み。

「…すいません、着替えて来ても？」

「あつああ、そうだな行つて來い」

「では失礼します、後帽子を」

如月は机に置いていた遮熱帽を福岡に渡すと、すじすじと部屋から退場して行つた。

「なんや、お約束は無しかいな」

右手に持つてペンで頭を搔き期待外れと呟く桂木に。

「桂木さん、お約束つて？」

「なに言つてゐん、兄さんのズボンが落ちてキャマー、てやつよ」

「ああ、確かに」

「だがそれならお約束どつり曹長は袋叩きだな」

「ははは、そうですよねえ」

解析結果

解析結果

戦闘服に着替え終えた福岡が隊本部に戻ると、如月と桂木が半紙程の画板を挟んで何やら話しこんでいた。

「先程の検査結果を話されているんですよ」

どうしようかと扉口で立ち止まって仕舞つた福岡に、台拭きで部屋の机を拭いている神崎が言葉を振つて来た。

「…そつか」

どんな結果か気には成るが、結論が出れば呼ばれるだらうと事務所に入る。

そして、すぐ。

「よし、結論は出たな。曹長来てくれ」

福岡は待つてましたと歩み出る。

「どんな結果でしたか？」

「そう急くな、結果は桂木軍曹」

画板を片手に立つ如月の隣で、タバコに火を付けた桂木が両手を白衣に突つ込み。

「結論からいくと、兄さんは一般的に呼称される魔女。まあ男である時点から違うんやけど…」

桂木は福岡を見ながら、一層深く煙を吸い吐き出す。

何やら話しが大きく成りそうな予感に、神崎も掃除の手を止め聴き入る。

福岡も身体を硬くし、喉が乾く。

「まあ扶桑国一千六百年の間、いづついた出現情報は確認はされてるんや、数は極僅かやけどね」

どうにも落ち着かない様で、頭を搔きながらチラリと隣の如月を見る。

如月がそれを汲み取ると。

「君は異人。分かりやすく言つなら天狗や鬼、それこそ直に狼男などと呼称される存在だ」

その言葉に、後ろでバケツがひっくり返る音が響く。

福岡本人も頭の中が混乱し始めた。

「ちょっとと待つてくれよ、俺には親だつて、兄弟もいるんだ。それがそんな化け物だなんて」

片手で遮熱帽の上から頭を押さえながら、視線が泳ぎ出す彼に話は続く。

「私も技術局にいた頃それに関する記述書を読んだけど、まさか実在するとはねえ」

一瞬重苦しい空気が部屋を充満し、皆押し黙る。

頭を押さえ押し黙っていた福岡が両腕をダラリと降ろす、そんな彼に如月が手を差し出そうとした瞬間。

福岡は沈み込むと踵を返、割れた窓に向け走り出し飛び出す。

一瞬の出来事に皆呆気にとられ、はたと窓際に走り寄る一人。

「ちょっと！ここの四階やで！？」

「そつ曹長！？」

福岡は赤い短髪をなびかせながら、途中一階の壁を斜め前に蹴り付け減速し、地面に三點着地を決め何処かへと走り出す。

それを唖然と見つめる一人、その後ろで走り出した際脱げ落ちた遮熱帽を拾い上げる如月。

「中尉！？どうしましょ福岡曹長が！？」

神崎はオロオロと、外に出て行くとする如月に。

「…馬鹿にはかなわんつか

そう言うと手に持った遮熱帽を被る。

その行動に合点がいったのか。

「そやね、馬鹿にはかなわんなあ」

それに続くように歩き出す桂木。

「ちょっとと、お二人共そんな」

あんまりの言によつて、どうすることも出来ずにはいる神崎に一人は。

「なに言いよるん睦月、早う行くよ

「彼はもう我々の戦友だぞ」

そう言うと出て行く一人の背中に

「あつ待て下さいよ！私も行きます！」

異人

窓から飛び降りた福岡はそのまま駐屯地の柵を飛び越え、フラフラと当ても無く歩き続け。

兵隊相手に商売をする、飲み屋が立ち並ぶ繁華街に来ていた。途中何度も無くその獣耳を指差し笑われ誹謗中傷を受け続けた。

「何あれ、男にくせしてあんなものせて」

「男の兵隊がウイッチ気取りか氣色悪い」

「頭が腐つて、獣耳が生えて来たか」

そんな言葉を聞いているのかいないのか、終始下を向き両手をズボンのポケットにいれフラフラと歩き続ける。

夕日も沈み掛けたその時、一件の風俗店の前を通りた時。

「おい兵隊さん、遊んでかないか」

その客引きはしつこく福岡を引き止める、それに答え無い彼だったが。

異変に気付く。

周りに一般の酔っ払いの姿はなく、彼を囲むように並ぶ柄シャツの集団。

「……」

「おいらなあつて、変態野郎。しかとしてねえで遊んでいいよ、そこ

の陰間屋でな……！」

そう言いつとそいつは下を向く福岡の腹に向か、鋭い右拳を叩き込む。空気が潰れる音が響く。

「ははは、だから来いって。……なつ！？」

下品な笑い方をするそいつの顔が硬直する、福岡の腹に叩き込んだ拳が抜けない。

そいつの拳は福岡の左手にがつしりとり掴まれ、そのまま手の甲に向け折り込まれて行き。

「ふつきやああああ！？！？！」

硬い物が砂を含みながら割る音とともに、両膝をつき崩れるそいつに見向きもせず福岡は手を放す。

手首から腕の中央まで碎け潰れた右腕を抱え込むそいつは、顔じゅうの穴と言う穴から体液を垂れ流しながら叫ぼうとした瞬間。

「つむせえよ」

ほの暗い赫い火を灯した瞳で一瞥すると、先程の音より凄まじい風切り音をともなつた右回し蹴りを側頭部に叩き込む。

吹き飛んだそれはそのまま路地へ吸い込まれ、何やら悲鳴が響いた。その一部始終を見ていた外野の柄シャツ達は、ゆらりと周りを見回す福岡の眼から、一様に目を逸らした。

彼はそのまま歩いて行こうと踵を返すると、一発の銃弾が頬を掠める。

ゆっくりと振り返ったその先には、拳銃を手に持つ白い三つ揃い。それ取り巻く様に四人の鳶職姿の男達、皆一様に白鞘の短刀や長刀を抜き身でチラつかせている。

「おい兵隊さんよう、えらくウチのもんを可愛がってくれるやないか。あれ、どうしてくさるん」

三つ揃いは回転式拳銃を向けたまま、吠えるが。

「……」

福岡は頬を流れる血を手の平で拭き、それを見て自嘲した。

「氣色の悪い氣狂いが、畠んじまえ」

それを合図に襲い来る鳶職姿の男達、一人が腰だめに短刀を抱え込み突っ込んで来る。

福岡は左足を捻りこみ、鋭い前蹴りを叩き込む。

上顎から鼻の軟骨ごと踏み抜かれ後ろに倒れる、その左横合いが長刀が横一線に襲い来る。

丁の字に身体をそらし通過する刀身を下から弾き、右脚を引き戻しづ足に左脚の踵で下顎から頭蓋骨全体を一線にかち割る様に蹴り上げる。

背後から刺して来る短刀を右脇に挟み、半歩右に出でへし折りこめかみに肘鉄を叩き込む、衝撃で頭を軸に一回転。

最後に残った鳶姿は両手に短刀を順手に握り、右手で上段から斬り込むと返す様に左手で横に切り裂く。

左右自在に嵐の様に福岡を追い立てる一本の短刀、変幻自在に交差する短刀が撃ち降ろされた瞬間、福岡は肩ごとぶちますかの懷に飛び込む。

後ろから見ていた三つ揃いの眼には、鳶姿の背に隠れる様に福岡が消えた瞬間、その背中から白い輪が觀えた。

口からどす黒い血を吐きながら崩れ落ちる手下、その脇で佇み半眼でこちらを觀て、小さく顎を上げる福岡の姿に。

「くそが、舐めてんじゃねえぞ！――！」

三つ揃いは怒りに顔を染め、拳銃を両手で構え福岡を撃つ、撃つ、撃つ。

彼は銃口と三つ揃いとその全体を観ながら、ゆらゆらと揺れながら近づく。

怒りに任せ乱射する三つ揃い、は幽靈の様に近付き弾が当たらない福岡に、その暗い赫い瞳に。

「ひつ、ひいい！？」

七m有った距離は、いまや銃口の真ん前に彼は居た。撃つ弾も尽きた三つ揃いは銃を捨てて。

「わつ悪かったよ、謝るからよお

両手を上げ降伏するが。

「腰の物、試してみろよ

脂汗や何やらでちぐはぐな顔をしていた三つ揃いの瞳が鋭く成り、腰に手を回しもづ一丁の銃を抜き去り眼前の福岡向けて発砲した。

氷川神社

氷川神社

銃声が轟、歡樂街は静まり返った。

その中心には一人の男が立っていた。

ガツシャリと地面に箱型弾倉の銃が落ちる。

三つ揃いの右腕に絡みつく蛇の様に福岡の左腕が絡み、右の手の平は白目を向いた三つ揃いの顔面を軋ませながら掴んでいた。

少しの間そのまま掴んでいたが興味をなくし両手を放し、崩れ落ちる後頭部に腰の捻りを乗せた肘鉄を叩き込む。

潰れる様な音を立て、顔面を地面に半分程埋めた。

そのまま今度こそ止める者も、見物人さえ居なくなつた道を歩いて行く。

その姿を見つめる視線に気付きもせずに。

福岡の背中を見つめるその視線は、その背中が見えなくなるまで見つめると遮熱帽の布を揺らし、日本髪の銀杏返しがチラリと見えた。

日も落ち闇が覆い始める街に、土地勘も無い彼はただただ歩き、導かれる様に赤い鳥居をぐぐり、大きな社台の前まで行つた。

「氣は済んだか曹長」

聞き覚えのある声に顔を上げる福岡、その先には賽銭箱に腰を降ろす如月の姿があった。

「中尉」

彼女は軽く飛び下りると、被つた遮熱帽を弄りながら近づいて来る。

「まったく、君は毎回こいつなのかね。直情ばかりでは困るのだが」

「中尉、すいませんが「すまんが何だ曹長」

顔を背け話を聞こうとしない福岡に、如月は遮熱帽のつばから眼光鋭く睨み、三歩の間合いで止まる。

一匹の狛犬が見護る中、二人は石畳の上対峙する。

周りに人も居らず、篝火が燃え照らすのみ。

福岡も逃げられぬ構える、それに呼応する様に如月は鯉口を切る。

二人の犬が互いに牙を？いたその時、篝火の蒔きが弾いた。

抜刀する如月の柄先を抑えようと右手を突き出す福岡。

「甘い！」

鯉口を握ったまま柄を逆手に握り、鞘ごと右に振る。

福岡は舌打ち一つでそのまま飛び上がる、鞘ごと振った如月はそのまま背を向け、逆手に握った太刀を抜く。

刃文に篝火を写しながら、飛び上がった福岡を横一文に切り裂こうと迫る。

上体を後ろに投げ出し、背面跳びの様に手の平で着地そのまま半捻りで距離を取るが、彼の戦闘服の胸部が一文字に斬り裂かれた。

太刀を正眼に構え直した如月も被つていた遮熱帽が脱げており、ひらりと空から落ちて来た遮熱帽は、つばが真つ一つ裂けていた。

「…まさか本気で来るとは思いませんでしたよ、如月中尉」

「貴様こそ、斬られてやつとやる気をだしたようだな福岡曹長」

二人は言葉を交わすが、表情は無い。

互いに自らの全力で相手にする、決めるは一瞬。

睨みあう一人、その視線にまよいは無い。

如月は太刀を上段に構え、柄口を右手で掴み。

「…来い！」

その言葉を反応する様に低く突つ込む福岡、烈火の気合で石畳」と

叩き斬らんと振るわれる太刀。

頭上から撃ち降ろされる雷光の如く一線を。

「貰つたあ！－！」

左足で右斜め前に飛びすさみ、右膝を叩き込もうと上体を捻る。だが、

「何！？！？！」

撃ち降ろされた雷光の一線に、身体が吸われ軸が傾き重心が狂う、

その瞬間に膝を抜き刀を返す如月の姿。

その一瞬で先が観えた福岡は、眼を瞑り小さく笑った。

その瞬間、

『バツシイイイン！－！－！』

狛犬

燃える様に痛い右頬を押さえ、石畳に尻餅をつく福岡。

保つけた様に上を見つめると、右手を張り上げ威風堂々と仁王立ち、

キリッと睨む如月の姿。

背後で力タリと転がる太刀。

「一敗だ、貴様は二度死んだぞ曹長」

「…は？」

その言葉に一瞬訳がわからず、尻餅をついたままの福岡が言葉を漏らす。

「何がはあだ。その四つの耳で良く聞け！今回と前回の戦闘だ！」

如月は右手で勢い良く指差す、それには福岡も負けじと吠える。

「はあ！ちょい待て！前回のどこだよ！つうか上のは魔力で本物はこっちだ！」

福岡は勢い良く立ち上がり、一人は額が当たる距離で吠え始めた。
「もう忘れたのか！最後の締めで貴様が放った爆発から安全圏まで
弾いてやつただろうが！」

「ありや互のがかち合つて吹っ飛んだけじゃねえかよ！」

「これだからこの直情馬鹿は！貴様の爆発以外取り柄のない技から
救つてやつた恩人に、この駄犬が！」

「ふざけんな！互いに吹き飛ばされて氣絶したくせしやがって！この
舞妓が！」

「なにおう！」「うんだどう！」

二人は互の手を握り合い、ギリギリとせめぎ合い子供の口喧嘩を始める。

そんな一人を、離れた社務所の影から見つめる一つの影。

「…なんか、仲良さそうですよね」

一つの影が、話出す。

風に煽られ転がる遮熱帽が、口々口と紫煙を燻らすもう一つの影まで転がる。

その影は足元の帽を拾い上げると。

「まあ、このままいつてもおもないし。いこか睦月」

「はい」

セミロングの洋髪を揺らし、神崎は小走りにいがみ合つ二人の元へ駆け寄る。

後ろから続く桂木も拾つた帽を指で回しながら、ゆっくりと歩む。

「いいだらうこの舞妓が、こうなりやジャンケンだ。文句ねえだろ」「よからうこの駄犬が、誰がご主人か分からせてやる」

二人は一瞬視線の火花を散らすと、両手を離し、構える。

「いくぞ舞妓」

「吠えるだけ吠えるが良い、この駄犬が」

二人は壮絶な笑顔を向け、拳を突き出す。

「いくぞ！」

「「「ジャンケン！」」

「「「ポン！…」」

「やつたあ、私の勝ちですね」

開いた手を掲げ跳び上がり喜ぶ神崎。

無言で自分の出した握り拳に目が行き、狐に摘まれたような顔で喜ぶ神崎を見る二人。

そんな三人の輪に。

「…あんた等、いい歳して何やつとんの」

紫煙を漂わせ桂木が呆れ顔で歩み出る。

「いや、これは…」

「その、なんだ…」

如月と福岡は見られていた事に、急に恥ずかしくなりあさつての方を向く。

その時神崎が一步踏み出し。

「曹長！「ゴメンなさい！私誤解を招くような事して」

「あたしもや、ほんに堪忍なあ兄さん。この通りや」

二人は福岡に頭を下げる、いきなりの事に彼はアタフタしだし。

「あ、いやその。俺の方こそいきなり飛び出して悪かつた、だから頭を上げてくれ」

そんな彼の背後で、如月は小さく笑いながら放した太刀を鞘に納める。

「私には殴りかかって来て置いて、優しいものだな」

「中尉こそ俺を斬つたじゃないですか」

何やらまた雲行きが怪しくなる一人。

「まま、ここはね、曹長」

「まうほら中尉も、後にしましょ後に」

無言で睨み合つ二人の間に、ナイスなコンビネーションで仲裁する、後衛コンビ。

「…ふん」

有る意味これまた良いコンビネーションの前衛コンビに、これには苦笑い。

帰り道

帰り道

和やかに話しながら歩く一人を前に、少し距離を置く如月と福岡。その足は、一台の軍用ジープの前で立ち止った。

乗り込もうとしていた桂木と神崎はそっと視線を向け、背を向けたままの立ち止まる如月。

「中尉、自分は……」

今だ心の何処かにわだかまりを抱いている福岡。その言葉にジープ脇の桂木が、如月に投げ渡す。それはクルクルと回転し、如月が受け止める。そして、彼女は振り返り。

遮熱帽を差し出しながら、微笑んだ。

「帰るぞ、貴様は我が隊の。いや私の戦友だろ陣」

その言葉に凍てつっていた心が氷解し、暖かさに震えて来る。そんな彼に先の割れた遮熱帽を、如月はボフツと被らせる。

「そうですよ曹長、私たち、戦友じゃないですか」

「そんなしみつたれてないで、早帰るで兄さん。これから団結会やジープから一人も負けずに朗らかに呼んでも来た。

それに答える様に、遮熱帽のつばを一気に下に下げ口で笑う福岡。

「行くぞ福岡、聞いての通り団結会だ。楽しもうではないか」

「うおっす、押忍！」

新たな一步を踏み出し、人は大きくなる。

そんな大切な一步を踏み出し、彼は満面の笑顔を向ける。

「そや、今回の飲み代は兄さんもちやで。こんだけ探させたんやしないな」

皆が乗り込みエンジンが回り出すと、運転席の桂木がそんな事を言う。

「あつそれ賛成え、曹長！」馳走様です」

「ええ、給金前だぞ俺！？」

後部座席の一人も各自お反応を返す。

「諦めるんだな福岡、君達の会だが腹を切つてもらおう。桂木、店を少し上げよう」

車長席の如月が椅子の背もたれに肘を置きながら、判決を下す。

「それええなあ、ほなら寿司行きましょ寿司」

「おお、流石太つ腹。曹長有難う御座います」

「かあ、もう煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

そんなこんなで賑やかに走り出す車は、一路桂木お勧めの寿司屋へと向かつた。

その日、思つ存分ドンチャン騒ぎをした一行は、次の日二日酔いと自責の念に頭を痛くしたが、これはまた次の話じ。

自戒予告

「そういうや桂木さん、私質問が有ります」

「?どうしたん睦月、改まって」

「あの陰間屋つてなんなんですか？」

「…ほう、耳年増な睦月ちゃんにしては以外や以外や」

「もう笑わないで教えてくださいよ、それに私年増じやありません

」！

「かつかつか、ほつかほつか。あんな陰間屋つてえのは…」

「え、えつえええええ」

「分かつたかあ」

「…世の中凄いんですね…」

「一生不犯、陰間茶屋大流行つてね」

「（照）…深いなあ…」

次回 出撃！派遣隊

第二話 当直勤務

当直勤務

早朝六時、起床ラッパが鳴り響く大宮駐屯地。

朝日も眩しい中、窓が開かれて行く隊舎の四階。

つばの割れた遮熱帽を被り、首にタオルをかけた男性兵士が外を見ながら大欠伸を一つ。

「…さて、メシ行くか」

腕を回し関節を鳴らしながら歩く。

彼はすでに戦闘服に編み上げ半長靴、隊事務所には折り畳まれた野外用敷布と小さく丸まつた寝袋が片隅に片付けられていて、タオルを後ろポケットに突っ込みつつ廊下に出て行く、まだ誰もない隊舎の階段を降り、玄関口を抜ける。

途中当直勤務の一等兵や伍長の敬礼に答礼しつつ、食堂に入つて行く。

その際裾のポケットから当直腕章を取り出し、順番待ちの兵士達の脇を抜けて行く。

「あつ 福岡曹長御早う御座います」

「ふつ あああ、朝から戦闘服姿とわ元気やねえ兄さん」

途中列に並んでいた桂木と神崎がはみ出し挨拶してくる、二人は動きやすい国民服姿。

戦闘服姿は福岡ぐらいだ、稼業時間以外戦闘服姿になる必要もなく、二人は点呼後そのまま食堂に来たようだ。

軽く挨拶を返した福岡の背中に、これ幸いと着いて行く二人。

面倒そうに並ぶ他の兵士の視線も気にせず、さつさと配膳所で朝食を受け取つて行く。

朝食を受け取り、盆を持ち上げた福岡に。

「おい、食堂では帽子を脱がんか貴様」

調理場の小太り中年兵士が福岡を指差し、注意して来る。

「すまんな糧食班長、見逃してくれ」

「あつこれは曹長失礼しました、ビツビツヒツヒツ」

「すまんな」

始め睨みながら言つて来た中年兵士だつたが、福岡の階級を見ると頭を下げる敬礼で見送つてくれた。

そのまま出口近くの席に三人で座ると、桂木が。

「見たかいあの態度、これやから糧食の輩は好かんのや」

「まあまあ桂木ちゃん、食事の時は笑顔でね」

朝食の納豆を混ぜながらだめる神埼、その脇でぬかが付いたままの漬物を持ち上げ皿に戻した福岡が。

「後このメシが美味くなつたらな」

その答えに続くように桂木が吠えだし、神埼は苦笑いしながら水っぽい豆腐の味噌汁を啜る。

軍隊は一つの完結組織、その全てを兵士達が分担しながら業務に励んで居る。

飯が不味い、ボイラーからのお湯が出ない、月一で断水する、修理に出した車両が帰つて来ず部品取りに使われていた、などなど。

特に男性兵士が多い兵士科の部隊では良くある事だ、洗濯に出したシーツが焦げていようと帰つて来ただけましだ。

朝食を食べ終え女性兵士宿所に戻る一人を見送り、営門で朝刊を受け取りに行く。

本来なら下つ端の当直兵士の仕事だがあいにく隊の当直は福岡のみ、営門所前の立ち番兵から敬礼され答礼しつつ入室する。

「営門勤務ご苦労様です、新聞と郵便物はありますか?」

挨拶をしつつ、中央に座る営門勤務幹部に話し掛ける。

「ああ福岡曹長、ご苦労さん。あんたんトコも大変だね女ばかりで。響きはいいが、あれだしなあ…」

「いやあ何処いってもそう言われるんですが、俺もまだ来たばかりでね、良く判りません」

肩をすくめる福岡に、當門勤務で疲れているのか哀れ眼で見てくる

當門幹部の准尉。

その脇から歩哨の軍曹が新聞と小包を渡してくれる、受け取り礼を言つと當門を後にする。

道を歩きながら新聞の見出しを見ると、扶桑海軍の船がネウロイの襲撃を受けるも、坂本海軍少佐と新人伍長一人のウイッチによりこれを切り抜け、統合戦闘団ウイッチ隊により撃破したと書かれていた。

背振山での戦闘以来この何日も暇を持てあましている我が隊とは大違いだなど、小さく自笑しそのまま朝の駐屯地を歩き隊事務所へ戻つて行つた。

朝礼

新聞を片手に隊事務所に戻ると。

「やあ福岡、当直ご苦労」

隊事務所の上座、隊長席に幹部制服姿の如月が座っていた。

「あ中尉、おはよう御座います。お早い出勤ですね」

「おはよう。私は何時もこのくらいだよ」

福岡は歩み寄り手に持った新聞を渡す、如月は礼を言いながら受け取る。

福岡は後ろに下がり、片隅のガスコンロで湯を沸かす。

しばし新聞をめくる音と、ガスの燃焼音のみが事務所に響く。

「… そう言えば、背振山での戦闘いらい平和だな」

「ああそれは自分も思いましたね、あれから一ヶ月ですか」

着隊いらい何も無い日々に、ため息が漏れる。

福岡は湯気が出始めたヤカンを上げ、急須に注ぐ。

「暇だなあ、何処かと演習でも組むか」

「… 出来るんですか、演習?」

ガスコンロ下の棚から湯呑みを一つ取り出し、茶を注ぐ。

湯呑みを盆に載せ、程よい温度の茶を運ぶ。

緑茶の良い香りが漂い、如月が新聞を起き、机に湯飲みが置かれた。

「有難う。できるも何も、幾つかやらないといけないしね」

盆を小脇に挟み、自分の湯呑みを持ったまま。

「まつ補給物品の整理や、草刈りばかりでは精神的に来ますからね。自分は賛成ですが、後の一人はどうでしょうか?」

「通常業務も軍務の一つだぞ。なにあの一人はどうせ通信機前でお茶会するぐらいだろ。前衛の私と君が良いなら、問題有るまい」

部隊通信を馬鹿にする訳では無いが、専門職の兵隊は自分の仕事が終われば後は状況次第。

一人は小さく笑いつつ、茶を啜り。

「まつ、そうですね。何時ですか予定は？」

福岡は準備の事を考えながら、茶を飲む。

如月はニット笑うと、机の引き出しから一枚の書類を取り出し、バンッと叩く。

「今日だ」

「うつづ！熱ちい！きょ 今日ですか！」

含んだお茶を吹き出しそうになるのを必死で堪え、涙目で聞き返す。

「いやあ、私もうつかりしていてな。ほら、君等の宴会の次の日下達されててなあ」

はつははと笑いながら、窓に視線を移す如月に。

「あれからつて、もう三週間程経ちますが」

腕組みし視線を合わせようとしない彼女に、福岡は机に手を置き非難するが。

「なあに気にするな福岡、我々の演習内容は不正規戦闘だ。行けば何とかなる、早速準備してくれ。0900には部隊を出るぞ」

その後福岡はいろいろ言いたい事は有つたが、車両準備と糧食の授与に走つた。

隊事務所から連絡を受けた桂木と神崎も、通信機材や武器資材の準備に追われ。

人数も少なく、演習内容も防御で無かつたので部隊物品の準備は滞り無く速やかに済んだが。

「桂木、神崎。貴様等なんだこの背囊入れ組は？」

福岡は最終点検に背囊入れ組品の確認を行つたが、出るは出るは娯楽品の数々。

「ですが曹長、これは私の経験が導き出した演習セットです」

「そりやて兄さん、部隊基準の入れ組品なんか使わんてえ」

広げられた入れ組品を前に、キヤンキヤン吠える二人を前に頭が痛

くなる。

「神崎、こりやなんだ？」

福岡はしゃがみ込み、物品を一つ持ち上げる。

「良いでしょ曹長 スイス製の蚊帳です。その小ささで、広げれば四人用なんですよ」

福岡は隣に目をやり、品を盛り上げる。

「桂木、これは？」

「おつ流石兄さん、それな今米国軍で試作運用されてるトランジスターラジオや。只の弁当箱ぢやうでえ」

誇らしげに片手を腰に当て、右手人差し指を振る。

「えつ、この大きさでラジオ聴けるの 桂木ちゃん凄い！」

「ほやろほやろ、これで暇な演習も森林浴や」

高笑いし始めた桂木に、キヤツキヤツキヤツキヤ 喜ぶ神崎。

福岡はしゃがみ込だまま立ち眩みを起こしそうだった。

その他にも折り畳みのクッションや、乾燥米の雑炊セットに羊羹やチョコレート、煎茶に小型のガスコンロ。

演習というより、友達とキャンプでもしに行くような気楽さ。

「まあ良いじやないか福岡、好きにさせてやれ」

ため息を漏らしていった福岡に、如月が声をかける。

彼もこれ以上考えない様にしようと、立ち上がる。

「はあ、あれ中尉。今回は戦闘服ですか」

「ああ、前回の戦闘でユニットが消失したしな。なに一般兵にはこれまで十分だ」

彼女の服装は皆と同じ、濃い緑の戦闘服上下に半長靴姿。腰の弾帯に何時もの太刀が携えてあつた。

朝霞訓練場

ああだこうだと言いつつも、荷物をトラックに積載し終えた一行は予定時刻0900一分前に営門を抜けた。

今回は経路を覚えるついでに福岡がドライバーを務めている。車長は如月中尉。

「そう言えば、演習相手は何処の部隊です。近場だと練馬か群馬ですかね」

？「まあその通りだ、今日のお相手は練馬の部隊だ。車両の機動力で即時展開してくる、良い試合相手だろ」

「もう少し早く報告があれば、作戦も立ちましたがね」

福岡は嫌味半分な小言を言いながら、横目で視線を飛ばす。如月はそれをチラリと受け止め。

「なあに福岡。実戦常に作戦有りきでは即応性に欠けると言つものだ、出たとこ勝負だよ君」

したり顔で腕組みし、人差し指を突き出す彼女に、苦笑するしかなかつた。

「まあ、それで宜しいなら、自分は構いませんがね」

「君も少しばかり我が隊に慣れて来た様だな、この調子で頼むぞ」

「へいへい、了解です如月中尉殿」

そんな会話を続けつつ、進路は朝霞へ。

それ程遠い訳でも無く、一時間もあれば着く距離に朝霞訓練場はあつた。

もう既に管理担当の中隊が入っており、ゲート毎に歩哨が配置してある。

トラックは宿舎地に進入し、如月の誘導に従い木製二階建ての宿舎前で停車した。

車両から降りた福岡は降板を下ろし、後ろに乗っていた神崎と桂木

が降りてくる。

「ふつ！はあ、いやあ着いた着いた」

「よつとう。ここが宿営地ですか」

「そつなんだが、宿営場所が何処だか。桂木は知っているか？」
早速自分の背嚢を引きずり出している桂木に声をかけると。

「何処つて兄さん、この宿舎やがな」

引き摺り出した背嚢を背負い込み、一階建てを指差す。

「え、でも桂木ちゃん。これ幹部用じゃあ」

その疑問に答える様に、如月が車長席から降りてくると。

「ああ、確かに幹部用だが。我が隊は一個斑をも欠く人数だからな、
何時もの事だ気にするな」

そう言い残すとスタスターと宿泊へ入つて行く、その後ろをさも当然
と桂木が続く。

またしてもいつも道理置いていかれる新人二人。

「まあ、それでいいなら俺は良いんだが」

「そうですよね、逆に考えれば凄く良い話ですし」

二人も先輩方の後ろに並び宿舎へ入つて行く。

その後宿舎の一室に女性三名、使われていない当直室に福岡が当て
がわれ、ひとまず昼食となつた。

各人飯盒片手に宿舎地中央、バラック小屋の糧食場へ移動する。

「おつとう、この香りは」

「おお、カレーだねこれは」

糧食場に近づくにつれスペイスの良い香りが漂い、先頭の桂木が鼻
をヒクヒクさせ笑う。

隣を歩く神崎も嬉しげに微笑む。

「ふむ、確かにカレーなら間違いなかろう」

「…まあ、普通ならデスがね」

後ろを歩く如月も腕を組み頷くが、隣の福岡は微妙な顔。

「…どうした福岡、カレーなら安パイだぞ」

「なら良いんですが」

何やら思う所が有るのか、苦い顔の福岡を見つつ、流れに乗り配膳を受けて行く。

糧食隊員から飯盒本体に米とカレールー、中蓋と蓋を繋げ生野菜とフルーツを貰つて行く。

今のところ異常は見分けられ無いが。

各人配膳を終え、近場で腰が置ける場所。

コンクリート張りの物干し場で車座に座る。

「では、皆」

「――「頂きます」」

如月が音頭を取り、食事を始める、そして。

「――？」

「あつれ？」

「なんやこれ！」

「ふむ、やはりか」

三名は一様に箸を止め、掴んだ飯盒の中。

カレーに眉をひそめるが、福岡は事実は事実と黙つて食つていた。

「福岡、君は知つていたのか？」

如月は配膳前からこれに気付いていたであろう福岡に話し掛け。

「なんで兄さん言ってくれんの！何なんこの野菜！味無いやん！」

「ふむまあ、そうだろな」

「でも曹長、なんでジャガイモや人参にカレーの味が。それに微妙に半煮え」

飯盒を下ろしチラリと三名を眺めた福岡は。

「カレールーと別に煮たからだ、それも途中で気付いて急遽な」

「まさか、いや確かにそれでこの味風味大虐殺のカレーか」

「なに納得しどん中尉！そんなんただのアホやん！何なんこの人参

！固！」

「カレーの野菜を忘れてて、途中参加ですか」

珍しい物を見るよつに味風味共に大暴落、匂いだけがカレーのそれ

眺める如月。

その隣で糧食批判を大声で叫び出す桂木、それえを宥める神崎。

その原因となつたカレーだが、おそらく刻んだ後水に浸し灰汁抜きをしたまま放置し、そのまま忘れさせていたのだろう。

最悪温野菜として出てくる場合もこのカレーには付き纏う、軍隊で美味しい飯はなかなか挙めないので。

作戦会議

作戦会議

その後、終始無言のまま味が無く野菜が固いカレーを渋々食い終えた一行は、宿舎の一室で今回の作戦会議を始めていた。

朝霞訓練所の地図を広げ、如月中尉が今回の演習内容を読み上げる。我々派遣隊四名は、山間部で防衛演習中の練馬駐屯地の歩兵第一連隊第三中隊への不正規戦闘。

ゲリラ戦を仕掛け、目標は第三中隊長の殺害。

すでに第三中隊は本日早朝から陣地を構成し、待ちの構え。

「それで、中尉。殺害した場合の判定処置は」

流石に本気で殺害する事は出来ないので、その判定基準を質問する。

「つむ、この土嚢を被せれば良いそうだ」

何やら後ろから引っ張り出した真新しい布の土嚢袋。

「装備は三八騎銃でよろしいんですか？」

「ああ君達、桂木軍曹と神崎伍長はそれで構わん。後で空砲を渡す、私と福岡軍曹はこのままだ」

「通信のあたし達の任務は、盗聴で良いんかな」

「そうだな、それと攻撃時の通信妨害を頼む。他有るか」

如月中尉が三名に視線を向け、皆が作戦を理解した事を確認する。作戦と言つても山賊の真似事をするだけだが。

「では、日没と共に作戦を開始する。各人仮眠を取るよつこ

「――了解しました中尉」――

そして、日没と同時に作戦は開始された。

「ふつあああ～、暇つすね伍長」

「まあそしだが、蛸壺掘るよりはマシだろ」

鉄条網で封鎖された山間部へ続く道路の脇。

茂みに隠れるように一人の隊員が腰を下ろし、だべっていた。

昨日演習場に到着し、早朝から始まつた陣地構成も概ね完成しこうして歩哨任務に逃げて來たが。

二人は傍に歩兵銃を立て掛け、疲労を癒す様に座り込んで居た。

「ああ、俺ちよいと小便」

「うーす」

伍長は立ち上がり茂みの奥へ消えて行く、その時丁度無線が入る。

『ガツ、05、00、状況送れ』

残されたもう一人の隊員がよつこらしょと腰を上げ無線機の受話器を握り。

「こちら〇5、異常無し」

『ガツ、00了、通信終り』

受話器を置いたその瞬間、不意に頬がヒヤリとした冷たさを感じ、振り向こうとするが。

「動くな、そのまま腹這いになれ」

彼は両手を上げ、ゆっくりと地面にひれ伏したそこに時、首筋に鋭い痛みを感じ闇に落ちた。

「中尉、先程の隊員を拘束しておきました」

倒れた隊員を敷物代わり座る如月に、茂みから音も無く福岡が現れた。

「どうか、通信網図は有つたか？」

福岡はポケットから折り畳まれた一枚の紙を渡す。

網図を受け取り一瞥すると、そのまま返す。

「秘匿はかかっていないみたいですね、周波数も生の様です。先程桂木に周波数は伝えています」

「…よろしい、最後にコレと歩兵銃のボルトを抜いたら先に進もう

前衛の一人は夕暮れと同時に行動を開始し、茂みの中から彼等を捕捉し、一人が席を外した際襲撃したのだ。

最後に気絶させ、茂みの奥で木を抱え込むように手首ビリビリを括り放置する。

「恐らく無線連絡は一時間周期、やつと始まりますね。気が抜けている様ですので車両を襲いますか？」

「…いや、このまま中央を抜け様。やる気が無いとは言えこれでも軍人だ、無駄に警戒せんでも良い」

「了解です」

今如月、福岡両名は先程まで一連隊の隊員がいた茂みで片膝を着き周囲を警戒しながら話していた。

二人の服装にほぼ同じ、戦闘服に編み上げ半長靴、頭上に遮熱帽。腰に帯びた太刀と、小太刀の違い、後は遮熱帽の鍔が割たままのを福岡が被っているくらいだ。

二人はそのまま茂みの中へ入り行動を続行する。

先頭は福岡、右後方間隔を開け如月が続く。

不正規戦闘

不正規戦闘

作戦開始と同時に、如月は少々驚かされていた。

それは福岡の身体能力と、状況把握による感の良さ。

先程の歩哨も、彼は50m前から気付いた、いやそれよりも前かもしない。

何故分かつたのか聴いても、周囲が不自然だった、それだけ。
そして彼が言う場所に敵はいた。

今も前方をただ歩いている様に見えるが、気配が薄くそのまま茂みや木々の縁に自然と同感している。

彼はもしや、忍びやマタギに類する技術を取得しているのかもしない。

そんな事を考え少していると、突如気配がふつと消える。

如月は焦らず、状況を確認する為その場に片膝を着く。

彼が消えた辺りを見渡すが、居ない。

左右を見回したその時、上から何かが落ちて来た。

何かと思い上を見上げると、
居た。

彼が消えた場所のすぐ脇の杉の木、その上15m程の場所の太い枝の上に足を乗せかがんでいる。

あそこから私に何か投げたのだろう、見ると何やら手信号のようだ。まったくユニットも無く良くやる、貴様こそ天狗ではないか。

福岡が指示す先にはここから少しの距離の丘、その向こう側に小屋があるようだ。

『敵、三名、巡回中』

手信号の内容から少々考える、取り敢えず左右に別れて迂回しよう。
私はその旨を伝え、左右に別れた。

「先程から〇五と連絡が不通らしいですね。攻撃でしょうか?」

「…かもしれない、バッテリー交換かもしかん」

「でもなんか、不安すよね」

小屋を中心に三人で巡回する兵士。

前の定時連絡では反応が有つたが、今回の連絡は不通のまま10分程過ぎた。

気にはなるがまだ確信がない。

先程〇五に一番近い〇四が確認に走っている、そのうち連絡が。

『ガツガツ、〇四、〇〇、敵襲!、繰り返す!、敵襲!』

三人の内右脇の兵士が背負いつている通信機から、けたたましく敵襲の電が入る。

三人は肩に掛けて居た歩兵銃のボルトを引き、空砲が装填されるのを確認し、銃口を腰ために全周を警戒し始める。

日も暮れ闇に包まれた山中が不気味に見えて来る。

〇五からここまでなら、真っ直ぐ突っ切れば一時間程。

もしや賊はもうすぐ側に。

その時右の茂みで、何やら物音が。

敏感になつていた三人は慌ててその方向を向くと、通信機を背負つた兵士が条件反射で引き金を引く。

弾は出無いとは言え、火花とガスが飛び散る。

慌てて止めようと中央の兵士が腕を伸ばしたその時。

背後に一瞬着地音がしたその時、発砲した兵士の歩兵銃が地面に落ちそのまま崩れ倒れた。

その背後に、鍔が割た遮熱帽を被り此方を睨み据える戦闘服姿の兵士がいた。

一手に別れ、左に福岡、右に如月が進む。

なるべく音を鳴らさず、有る程度距離を取り歩哨と距離を取りつつ移動していたが。

「…運が悪い」

そにまま通り過ぎるはずだつた歩哨達が、何を思つたか距離は空いでいるが真横で話し始めた。

氣付かれぬよう地面に伏せ、敵の情報に耳を向ける。

どうやら最初の襲撃に氣付いたようだが、まだ半信半疑の様子。国家間の戦争が取り敢えずは無いとは言え、この体たらく。

軍人とて人の子か。

そう嘆いている時、奴等を後押しする様に敵襲の連絡が入る。

慌ててふためきやつと銃を構えた歩哨達に、何故かため息が漏れる。だが、それがまずかった。

少し腰を動かしたさい、太刀の鞘先端が石にぶつかり音を出した。次の瞬間誰何も無く轟く銃声、銃口がこちらを定めきれてい無いとは言え、肝が冷える。

だがその時、歩哨達の背後に影が降り立ち発砲した兵士の後頭部に掌底に入る。

衝撃が逃げず脳を搔き乱したその威力で、そのまま崩れ落ちた。

一体何が起こつたのか分からぬいが、此奴は敵だ。

今や一人になり距離が近い、これでは撃て無いが、これなら。

中央に位置していた兵士が歩兵銃の床尾と握端を握り氣合と共に飛び出す。

「いつやあ！！」

裂帛の氣合を発し、銃口を敵に突き刺すように全体重を乗せ飛び出す。

放たれた矢の如く、歩兵銃の銃口が必殺の速度で飛び掛かる。

敵はだらりと右腕を前に垂らすのみ、もらつた！

兵士は勝利と、自らの技術に絶対の自信を有していた。だが。

必殺の速度と長い銃身長を生かした銃剣術も、刺突のみなら。

銃口が前に垂らした間合いに入ったその時、ダラリと下がつた右腕が閃き右足ごと左に踏み込み、鎌首をもたげた右手の掌底で顎を打

つ。

必殺の速度で飛び込み、それを見事にいなして打ち込まれた掌底の威力は飛び掛かった本人へ見事に返される。

頭と頸を残し手足身体が宙を舞う。

そのまま白目を向き地面に墜落。

そして、最後の一人。

待っていたのか隙を伺っていたのか、最後一人になった兵士は仲間が墜つし、大地に崩れたその時飛び出す。

だが目の前で自爆した戦友の二の舞にならぬ様、床尾をかち上げ歩兵銃を棍棒の様に振り回す。

顎を狙い床尾を身体ごと打ち込むが、軽く後ろに下がられ避けられる。

そのまま動作を止めづ、左足を踏み込み歩兵銃を真横に降る。

だが、その時踏み込んだ左足の膝裏に激痛が走る。

回避されたその動作で、強烈な下段蹴りが地面に向け膝裏を蹴り落としたのだ。

そのまま大股で内に入り込まれ、右顎に衝撃が走る。

索敵

「…やり過ぎではないか、助けて貰つてなんだが」

二人目が地面に突つ伏したその時、如月は茂みから抜け出し事の成り行きを見守っていた。

最初の通信兵も鼻血を出し白田を向いているが、取り敢えず脈はある。

次の銃剣術の兵士も衝撃で前列の歯が砕けているが、息はしている。まあ此奴は自業自得だが、最後の兵士はダメージが抜けるまでは走れんだろう。

暗くて顔が確認でき無いが、何やら怒りを孕んだ空氣を福岡は発している。

何も言わず氣絶した兵士の足を掴みズルズルと小屋の脇に二人を転がし、後ろ手で縛つて行く。

如月も取り敢えず小屋の様子を伺い、周りの安全化をはかる。どうやら周囲に敵はない様だ。

荒々しく氣絶した兵士達の持ち物を物色していた福岡も、少しは落ち着いたのか近づいて来る。

「…中尉、目ぼしいモノは有りませんでした」

「そうか。それで、気は済んだか」

その言葉に少々凹んだ様で、肩を落とし帽の鍔を下げる。

「まあ、貴様の気持ちには感謝する」

その言葉にビクンと肩を震わせ、帽の間から目が見える。そんな彼の肩に手を掛け、如月が笑い。

「あんな体たらくな帝国軍人に制裁を加えるのに気持ち、上高として嬉しいが、まあ程々な」

高らかに笑い労つてやつたが、まゆを歪められた。

何やら違つたようだが、よく分からん。

取り敢えず、困惑顔の福岡の眉間に「△」をいれてやる。

「あた」

「さて、こまま近くの部隊を潰すぞ。貴様ばかり働かせては私の出番が無いからな」

『ほなら心配いらん』

その時不意に小型無線機から連絡に入る。

「どうゆう意味だ桂木？」

『さつき傍受したんやけど、そつちに三中隊の遊撃隊が向かうそいや。規模的にそれ潰すしたら終わりとちやうかな』

「そうか、それは好都合」

その時若干下を向いた如月の一タリとした笑みに、福岡の産毛が逆立つ。

「ですが中尉、それでは隠密行動が

「なに、一人残らず潰せばよい」

その笑顔は、正に魔女。

「全く歯痒い敵よ」

「ですが中隊長、これで一撃は『えられます』

「なにをいつちりますか運官。我が一小隊が遊撃隊がたかが一匹の賊ごとき、蹴散らしてくれましょう！むわっははは！」

「そうわ言いますが猪田少尉。相手は魔女ですよ」

「鹿井少尉の言う通りです猪田少尉。魔女は其だけで脅威だ」

「なあにをいつちりますか鹿井少尉も蝶山少尉も。魔女とて小娘

一匹、戦いは数と火力ですぞ！そんな弱氣でどうされる」

大きな本部用天幕の中で、第三中隊の幹部が議論していた。

今回の演習がウイッチとの演習である事は、以前から報告は受けている。

人員と装備も向こうから報告を受けている。

ユニット無し、人員四名。

当初は楽観視していたが。

夕暮れと同時に山道入り口の歩哨がやられ、次は山林の歩哨。

連絡が不通になり、山道入り口に塹を走らせれば、呑氣にも捕縛されていた。

入り口の警戒任務に着いていた兵士の話では、賊は一人。

定時連絡後、直ぐに捕縛され時間的猶予と通信網図が奪われたが、半刻後山中で空砲が轟いた。

山中の〇二との連絡が切れ、恐らく敵はそこに居る。

小娘如きと侮つたが、なかなかやりある。

だがこれで決するだらう。

第一小隊が遊撃隊二十名が向かっている、これを潰されれば後が無いが、此方とて演習目的は防御と宿営。

山狩りに陣を敷いた訳ではない。

その時天幕の入り口から通信兵が報告に入つて來た。

「報告します。遊撃隊賊と遭遇、降伏勧告を実施したとの事です」

「…始まつたな」

遊撃隊

遊撃隊

『貴様等は包囲された、大人しく投降しりろ』

「…あんな事言つてますけど」

「所詮は雑兵よ、物の数では無い」

桂木からの連絡後、一台のトラックが近くの山道にタイヤを滑らせてながら停車した。

荷台に幌は無く、次々に兵士が降り出し、一列縦隊でキビキビと走り如月と福岡の全面に展開した。

二人は兵士達から隠れる様に小屋を背にしている。

「どう出て来ますかね」

「私の要望とすれば、乱戦に持ち込みたいが。福岡小道具は有るか？」

有るかと聞いてはいるが、ほんとある事前提の様な顔で見られ。福岡は苦笑いしながら、太腿のポケットから一つの球体を出す。

「ふむ、何だ？花火か？」

「鉄粉とマグネシウムの花火ですよ、燃焼速度が早いので目眩ましになります」

「ふふ、面白いな。流石は福岡、機を見て始めようか」

早く闘いたいとウズウズしている如月は、既に鯉口を切り何時でも抜ける体制だ。

何とも、悪巧み考える子供の様に無邪気なんだが。

「鎌瀬曹長、賊は投降してこない様ですが」

「小屋を挟み一列横隊で並ぶ兵の後ろで、士官が一人話していた。

「む、そうか。よし最終勧告後一班で撃撃する、右翼は我が班、左翼は秋田曹長の班でお願いします」

「分かりました。では、勧告ご動く様伝えねば」

「お願いします」

士官は自分達の班に作戦を「え、移動の準備をする。

『最終勧告だ、大人しく投降しろ』

最終勧告にも、小屋の裏に潜伏する賊に動き無し。

士官が進軍の合図を出す。

各班の士官を先頭に左右に十名づつ一列に走り出す。

小屋が目前に入り、二班は大きく膨らむ。

その時。

小屋の屋根に人影が降り立ち、兵士達が一斉に銃を構える。人影がその視線を一身に受け、両手を広げる。

その瞬間、暗闇を打ち碎く真っ白な閃光。

突然の光に目が眩む。

「いやはや、派手な花火だ」

閃光が瞬いたその時、如月は右手に展開した部隊に突っ込んだ。福岡に言われた様に目を瞑つていたが、目蓋越しにもその光は感じられた。

急激な光量に目が眩む兵達、ある者は頭を降り、ある者は両目を押さえていた。

ただでさえ力量が違うと言うのに、これではまん板の鯉以下だ。如月は抜刀した太刀を返し、まず先頭で悶えている士官を峰打ちで転がす。

返す刀でその隣。

やつと何か起こっていると理解した兵士が、見えない目で銃を振り回す。

まあ、この状況で撃たないだけ利口なのだろう。

銃を振り切り、また振るおうとするそいつの手の甲を打ち、銃を落とし踏み込む。

その勢いのまま胴を抜く。

他の兵も攻撃を受けているのは気付いている様だが、まともに目も

見えん状況ではかませ犬にもならん。

後は適当に打てば終わつた。

当たり稽古よりも歯応えが無い。

福岡にあの花火を使わせたのが不味かつたか、面白くも何とも無い。振り返れば向こうももう仕上げ、兵士が笛を舞つていた。

「…なんとも、張り合ひが無い」

その後、簡単に返り討ちされた總勢一十名の兵士は、ズルズルと足を引かれ小屋の周囲に集められ。

福岡が兵士の懷や持ち物を漁り、情報資料を探しつつ、行動食や慰安袋は脇の如月に渡す。

「ふむ、やはりチョコレートは美味だな。これで型崩れしていなければもっと良かつたんだが」

検査し終わり、氣絶した兵士を座布団替りに座る如月は、戦利品のチョコレートを食していた。

脇には袋一杯の慰安袋が一つと、煙草やスルメ、空の袋が転がつていた。

「あつ中尉、キャラメル残しとして下さいよ。自分も食いたいんで」「むつ、なにを言つとる福岡曹長。これは徵発した物質だぞ、所有権は上官の私に有る」

「…中尉は甘味類がお好きなんですね」

「甘い物が嫌いな女子がどこに居る」

通信手

「桂木ちゃん、お雑炊で来たよ」

「おっやっとかいな、まつとったんよ 昼があんなんやろ、私もうお腹が

「あはは、まああのカレー確かに。あつでも晩御飯焼き鮭出てたら貰つて追加しちゃいました。特性鮭雑炊」

「よー待つてました!」

桂木と神崎は今、部隊から乗つて来たトラックの荷台で温かい焼き鮭入の雑炊を食つていた。

場所は今回の演習区域内ギリギリの端し。

車外に野外用の長いアンテナを設置し、コードで荷台の通信機に接続してある。

始めは急いでこの場所にトラックを走らせ、通信環境を整えたが、ものの十分程度で終了。

その後は荷台に神崎の蚊帳を張り、前衛の一人が手に入れた無線網図の周波数を入力して聞き耳を立てて居るが。

「…何だかもう終わりそうですね」

飯盒の雑炊を冷しながら、神崎はボソリと呟いた。

「アツアツ。ふ〜、まあ大体うち等派遣隊の演習なんか、毎回こんなもんよ」

よほど空腹だったのか、桂木はまだ湯気の上がる雑炊をがつつきながらも答える。

「まあ確かに人数いませんし、陣地作る必要有りませんしね」

「まあ何や、中尉の話やと本当はせんでも良いんやうつけど、取り敢えずの体面見たいなもんつて言つてたな」

「そりですよね、管理野営より楽ですもんね」

「そう言つと、しばし一人は食事に専念した。」

周囲に通信のノイズと、雑炊を掻き込む音のみが響く。

明かりは小さな豆電球一つのみ、闇の暗闇には心ぼそい。

だからと言つてこれ以上目立つ事をすれば、流石に斥候の一いつや二

つ呼び寄せる事になる。

食事を終えた二人はただボーと暇を持て余すのみ。

着い先ほど遊撃隊を壊滅させたと連絡が入つたが、この調子で王手を掛けるか。

「…あつそいや羊羹あるんやつた。食べる?」

「それなら私、煎茶入れますね」

「羊羹あたしの背嚢の中やから、一緒にお願ひねえ」

「は～い」

派遣隊通信手、本日も平和である。

「くつ！おのれ魔女め！我が小隊を打ち破るとは」

本部天幕の中、猪田少尉は遊撃隊が壊滅した報告を聞き怒りもあらわに立ち上がる。

状況は一気に最終段階へと転がり落ちた。

もう刺客を打つ術は、この本部にいる兵士のみとなつた。

刺客を打つ為兵を集めにも、これ以上削れば防御陣地に穴が出来る、其だけは許され無い。

もしこのまま指揮所が落ちようとも、防衛陣地さえ盤石なら最低限の任務が達成出来る。

これは演習だが、実戦なら敵を前に背を向ける事になる、其だけは許され無い。

後はここに居る小隊長を各小隊に戻し、部隊の活動を最低限保たねば。

上座に座っていた中隊長は、決断の時と眼光するぞく立ち上がる。

「諸君、恐らく賊はもうそばだ。最低限体制だは保たねばならん、直ちに各小隊に戻つて来れ」

「ですが中隊長！」

「猪田少尉！これは命令だ」

中隊長と猪田少尉は睨み合つも、命令とあらば兵士たるもの従わなくてはいかん。

猪田少尉は悔しげに顔を歪め無帽の敬礼をで答える。

それに続く様に天幕内の幹部は皆立ち上がり、中隊長に敬礼した。

「各人持ち場に戻る様に、解散！」

だがその時、天幕の入り口から警備の兵隊が飛び込み、一度跳ね地を滑り幹部達の足元、天幕中央で停止する。

「いかん！」

白目を向いた兵士を見て氣付き、中隊長が腰の拳銃を抜こうとしたその時、一陣の黒い風が駆け抜ける。

眼下の兵士を踏み付け、気付けば小太刀が首に突き付けられた。

「そう急いで解散もなかろう中隊長殿」

その声と同時に、天幕の入り口が斬り裂かれ、暗闇が口を開ける。

「きつ貴様！魔女か！」

眼前で割れた遮熱帽の鍔から刃の様な眼をした兵士が、首の切つ先是そのまま膝を折る。

「如何にも、魔女だ。どうやら王手の様だな」

声は闇から聞こえる。

周りの幹部達も、中隊長を人質に取られ動くに動け無いが。その声に一斉に視線を飛ばす。

暗闇から軍靴の音も高らかに、太刀を引っ提げた兵士が闇より歩み出る。

一步一歩が優雅に、そして凱旋を果たした兵士のように堂々と。

王手

「くつ！」

「そう悔しがるな、これは演習だ。実戦で頑張ってくれ」
本部天幕に侵入し、中隊長の身柄を確保した如月、福岡両名は居並ぶ幹部を座らせ今回の演習結果を報告し、実質的にはこの演習は終了した。

福岡は脇に有つたパイプ椅子を如月まで持つて行くと、右脇で片膝を付き待機する。

周りは三中隊の幹部が車座に座り、中隊長の膝には土嚢袋が置かれていた。

中隊長は悔しげに眉間に皺を寄せ、伝令係りが入れた茶を握つていた。

だがその脇の小隊長、猪田少尉は今にも掴みかからんと顔を鬼の様に紅く染め叫びだした。

「きつ貴様！そこの曹長！」

「…何か」

始め自分かと思い、戦利品のクラッカーを齧つっていた如月は、右脇に控える福岡を見る。

答えた福岡はいたつて普通、と言つか表情が無い。

「貴様は男児だろうが！なぜそんな魔女なぞに就く！」

指差され怒鳴り散らす様に言われても、福岡は黒子の様に膝を付くばかり。

だが、変化は一瞬だつた。

膝を付き幅の鍔から見える瞳は温度を無くし、影の様に消していた氣配が一挙に指向性の物へと一変した。

「猪田少尉！」

空気が一変したのもそうだが、目の前に幹部の魔女だを罵倒した事

に鹿井少尉が叫ぶが。

「五月蠅い！おい貴様！まさか魔女の色仕掛けにでも「猪田少尉！」流石にこれ以上言わせては不味いと中隊長が怒鳴る。だがそれをももう手遅れ。

地面が爆ぜたかの勢いで福岡が猪田の巨体に飛び掛かる。突如顔面を覆つた暗闇に対処出来ず、そのまま椅子ごと後ろに倒され背中と後頭部を強打する。

飛び出した勢いのまま、左手で顔面を掴みそのまま踏み込み地面に叩き伏せ、右手を手刀に変え引き上げたその時。

「やめる陣」

引き上げた右腕の肘に太刀の鞘が触れる。

福岡は左手を放し、立ち上がる。

打ち据えられた猪田は、衝撃で意識を無くしていたが直ぐに回復した。

苦痛に顔を歪ませ、頭を振ると。

「貴様！上官への暴力とは何事か！」

「それなら言うがな少尉。私はこれでも中尉なんだよ、先の発言。上官への侮辱罪で告訴しようか」

地面に腰をつけたまま叫ぶ猪田に、如月は一片の容赦も無く睨み付ける。

その余りにも冷たい瞳に、猪田の熱も冷めて行く。

「申し訳ない中尉。彼には私から言っておく」

事の次第を傍観する事しか出来なかつた中隊長が、何とか間に入る。

「それではお願ひしよう。曹長、帰るぞ」

決して友好的とは言えない視線を、まるで気にせず堂々と天幕を出て行く。

福岡はまだ收まら無い物があるが、如月に続いて出て行つた。

「……」

本部天幕を抜け、道路を歩く影が一つ。

演習場に外灯も無く、光源は空の星だけ。

暗闇にも眼が慣れた一人には十分な明るさだ。

「まだ怒っているのか？」

「…中尉は、良いんですか。あんな事言われて

「まあ、気に食わんのは確かだが。もう慣れたよ」

福岡の一歩前を如月は歩いている。

両手を腰の後ろで組み、ゆらゆらと星を見ながら歩いていた。

「俺はムカつきます」

戦い意外では、珍しく感情をぶち撒ける福岡に。

如月はくるりと反転し、眼をあわせる。

「福岡は、初めからああ成るのが分かつていてあの場でああしたの

だろ」

「…俺は、普通科の兵士でしたから」

後ろ向きに歩き、自分の眼をみてくる如月に、何だか恥ずかしくなり顔を背ける。

「有難う、陣」

その言葉につい顔を向けると、そこには無邪気な笑顔があった。

「いいえ！じつ自分は当然の事を！」

「なに、ちゃんと礼がしたかっただけだよ。それより大丈夫か？何

か変だぞ？」

「そつそんな事」

とか言いつつも、ブリキ人形の様な動きをする彼に。

「おーおい、本当大丈夫かちょっと額かしてみ

そう言ひや、福岡の額に如月の手が触れる。

「な！」

「ん？ちょっと熱いか」

「俺先に行つてます！」

触れられた瞬間、謎の熱エネルギーが福岡の体内で大暴走を起しきなり猛スピードで走り出した。

「おい待て！風邪なら軍医に！おい待て福岡、福岡ー！」

そうして、一つの影は闇夜に轟がしく走り去つて行つた。

自壊予告

「中尉」

「どうした神崎？」

「実は演習中食べ過ぎちゃつて。良いダイエット法有りませんか？」

「それなら良い方法が有る。ストレス解消にもなるし動きも機敏になるぞ」

「えつ本当ですか でもまさか、軍隊筋トレとかじゃ無いですよね
「そんな無意味な事はせんよ。しかも一回五分だ」

「えつそれ凄い 是非教えて下さー」

「よし、なら福岡も誘おつ。福岡ちゅうといいか。今日は神崎もやるうじい、三人で回せるだ」

「……えつ、なんで曹長が。回すつて？」

「そうですか、なら先ずは自分が。ドウリヤアアアアーーー！」

「きやあああ！ いきなりつて、うわああー！」

「こら神崎逃げるな。組み手にならんぞ」

「その前に死んじや、うつわああー！」

「オラオラオラオラーーーー！」

次回 記録歓迎会

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3676u/>

陸戦ウィッチ

2011年10月9日09時21分発行